

第6回 地域創造学環フィールドワーク報告会の開催にあたって

2016年度の地域創造学環の開設とともに始まったフィールドワークは、地域協力事業者の皆さまとの緊密な連携・協働関係のもと、学生にとって多様な学びと成長の機会となってきました。そこでは、地域というものをイメージや記号に抽象化された「地図」で認識する以上に、「現地」に身を置き体感・共感し、圧倒的な現実感を得ることが可能となっています。現地で体験する気付きは同時に、自己の力量不足を自覚させ、学内での学習動機に着実につながってきました。学生たちが得た自信や未来への期待は、地域の皆さまのご支援なしには成し遂げられなかったことと思います。ここに深く御礼を申し上げます。

2021年度のフィールドワークは、残念ながら、新型コロナウイルスの感染症拡大が続き、制限しながら実施せざるを得ない状況となりました。移動する学生数、宿泊施設の利用法、屋内イベントや会議開催形態など、縮小や廃止を余儀なくされました。希望に燃え入学してきた1年生も、慣れ親しんだフィールド活動の理念と実績を引き継ごうとする上級生にとっても本来臨んでいた活動ではなかったかもしれません。しかしながら、学生達はモチベーションを持ち続け、事前学習の充実やオンライン・インタビューの実施など様々な工夫で乗り越えてきました。果たして地域で求められているニーズとのマッチングが果たされていたでしょうか。ぜひご覧いただけるようお願いいたします。

さて、静岡大学は、法人の統合・大学の再編という課題に際し、あらためて地域との協働のかたちを模索してまいりました。そして、既にHPでご案内しているように、本学6学部の教育成果を融合するとともに地域創造学環を発展的に取り込んだ新学部を2023年に開設する見込みとなりました。それにともない、地域創造学環の学生募集は停止することとなります。これまで地域創造学環を支えていただいた各界各層の皆様には、ご心配をおかけすることになり申し訳ありません。しかしながら、2022年度入学者を含め、在学生在が卒業するまでは、現在の地域創造学環の教育体制を維持し、フィールドワークをはじめとした教育を実施いたします。未来を担う若者を育成する役割は大学だけではありません。地域ではいったいどのような人材を必要としているのか、今後も社会の皆様とともに考え一体となって取り組む所存です。これからの地域づくり人材の養成について誠心誠意検討してまいりますので、引き続き、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう切にお願い申し上げます。

最後となりますが、地域創造学環のホームページ上 (<https://www.srd.shizuoka.ac.jp/>) でフィールドワークの様子を公開・更新しております。内容も充実してまいりました。こちらでもご覧いただければ幸いです。

2022年5月24日

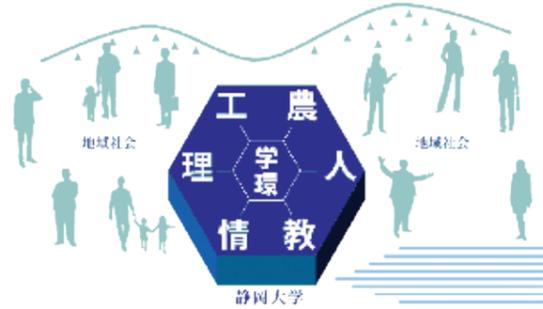
国立大学法人静岡大学
地域創造学環長
江口 昌克

目 次

地域創造学環とは／フィールドワークの取り組み	2
地域創造学環のフィールドワーク／フィールドとテーマ	3
2021年度フィールドワーク報告 ※報告内、学生の学年及び教員の職位等は2021年度で表記	
静岡市 清水港周辺地域	4
静岡市 庵原地区	6
静岡市 おまち	8
静岡市 浅間通り商店街	10
焼津市 浜通り	12
浜松市 浜松文芸館	14
浜松市 佐久間町	16
田園空間博物館 南遠州とうもんの里	18
御前崎市	20
松崎町 商店街	22
松崎町 観光と防災	24
東伊豆町	26
伊豆半島ジオパーク 保全と防災	28
伊豆半島ジオパーク 教育	30
多世代の居場所づくり	32
学内地域連携拠点	34
2021年度に2年半の活動を終えた学生たちからの声	36
フィールドワークにご協力いただいている地域のみなさまからの声	40

地域創造学環とは

静岡大学地域創造学環とは、2016年4月にスタートした従来の学部の枠組みを越えた新しい全学学士課程横断型教育プログラムです。静岡大学のすべての学部（人文社会科学部、教育学部、情報学部、理学部、工学部、農学部）の授業を履修することができます。幅広い教養と高い専門知識を身につけながら、積極的に地域（フィールド）に飛び出し、より魅力的な地域社会の創造に取り組むことができる人材を育成します。



フィールドワークの取り組み

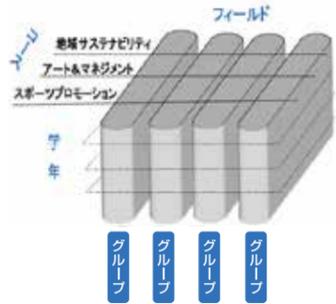
現在16テーマで、地域の方々と交流しながら地域の課題や資源を発見・探求し、課題解決のための提案や実践を行っています。

地域創造学環のフィールドワークの特徴

- ① 地域に密着した体制により、地域の実情と課題に正面から対峙
- ② 3コースを融合したグループを編成し、異分野が結束して取組む
- ③ 縦の繋がりを重視し1年次から3年次をひとつのチームとする
- ④ 単年度ではなく、中長期的に地域と関わり、信頼関係を醸成

コース融合のグループ編成

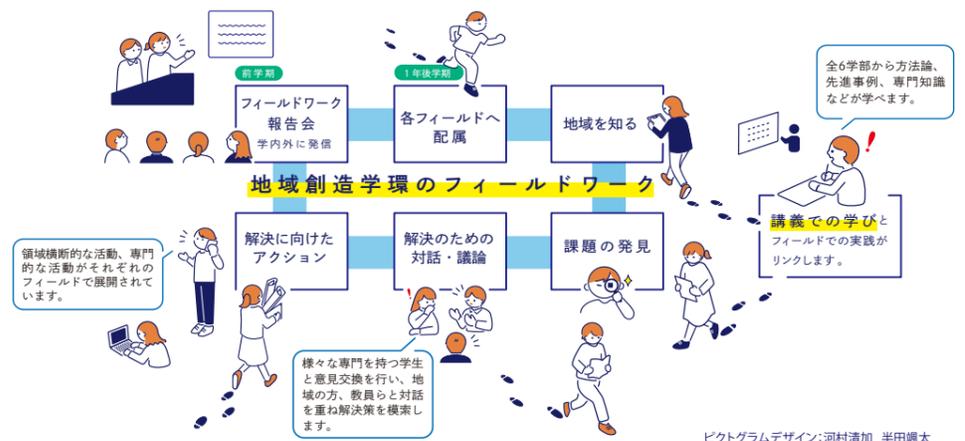
コース、入学年という枠にこだわらないグループ編成でフィールドワークを行っています。



※本報告書では、「地域サステナビリティコース」の学生をコースの中の「地域経営」「地域共生」「地域環境・防災」の各分野に分けて記載しています。

フィールドワークの年次別到達点設定

フィールドワークは単年度完結ではなく、数年間にわたり地域及び関係者と連携しながら課題解決に取り組めます。



ビクトグラムデザイン:河村清加 半田颯太

地域創造学環のフィールドワーク／フィールドとテーマ

静岡市

清水港周辺地域
清水港周辺地域が“つながる”“ひろがる”“にぎわう”活動

庵原地区
地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化

おまち
おまちを中心とした静岡市内のにぎわい創出

浅間通り商店街
浅間通り商店街のにぎわい創出

多世代の居場所づくり
多世代の居場所づくりと防災教育の実践

焼津市

焼津市浜通り
地域住民と高校生との交流に基づいた地域づくり活動

学内地域連携拠点
(静岡大学静岡キャンパス)
静大発 地域と大学の連携を広めよう！

伊豆半島ジオパーク 保全と防災
伊豆半島ジオパークにおける環境保全と防災対策

伊豆半島ジオパーク 教育
伊豆半島ジオパークの持続可能な開発と教育 (SDGs/ESD) の推進

東伊豆町
新しい観光スタイルの発掘・創出プロジェクト

松崎町 商店街
なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出

松崎町 観光と防災
防災と観光の両立

浜松市

浜松文芸館
私のまちの文芸世界

掛川市

田園空間博物館 南遠州とうもんの里
子どもたちを呼び込むための環境づくり

佐久間町
交流の輪づくり～新たな関係構築～

御前崎市

御前崎市
御前崎スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～

メンバー
(地域環境・防災) 1年 小林芽吹
(スポーツプロモーション) 3年 大川原翔、深井康平、本田悠、
2年 合田千夏、澤田美咲、鈴木美優、
1年 大須賀祥真、新宮周馬
指導教員：○准教授 石川宏之、教授 小田誠二
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
有限会社都市環境デザイン研究所

地域概要

清水港周辺地域は、駿河湾で獲れた新鮮な海産物を味わえる「河岸の市」や、港と直近の大型複合施設「清水エスパルスドリームプラザ」、清水港の歴史を学べる「フェルケール博物館」など、魅力的な観光資源が多く存在する地域である。美しい富士山を眺望でき、清水港に所縁のある清水次郎長の生家や清水港船宿記念館「末廣」など歴史文化施設も点在している。大型外国客船の寄港により、外国人観光客が多く訪れることも魅力の一つである。しかし現在は人口減少や高齢化、新型コロナウイルスの影響による観光客減少などといった課題がある。



清水港の様子

これまでの活動

1. 事前研究レポートを活かし、課題解決の情報共有に利用

新型コロナウイルスの影響でフィールドワークを実施できなかった期間に、各自で地域活性化に関する国内の成功事例を調査し、「事前研究レポート」を作成した。その後の活動で本地域の課題解決に役立つヒントを整理し、情報共有した。



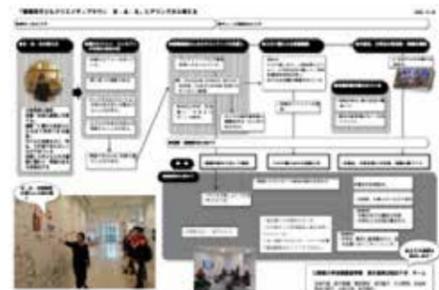
話し合いの様子

2. 4施設のヒアリングによる地元認識との相違点発見

「河岸の市」「駅前銀座商店街」「ちびまる子ちゃんランド」「ま・あ・る」の4施設を見学し、代表の方にヒアリングを実施した。各施設が抱える課題などを伺い、地元認識と実情のズレや問題点を整理した。

3. 実現可能性のある取り組みの創出・提案

事前研究レポートや施設ヒアリングなどを踏まえ、課題解決に向けて自分たちが学んだことや特技等を活かした「商店街の空間を利用したスポーツイベント」や「景観の良さを活かしたウォーキングプログラム」などの実現可能性のある具体的な素案をまとめた。



ヒアリングのまとめ

2021年度の活動について

1. まち歩きと企画立案

まち歩きを通して地域の現状や課題を知り、自分たちの特技を活かして何ができるかを話し合い、フォトゲイニングの実施を考えた。まち歩きと話し合いを繰り返し行うなかでポイント地点となる場所やコース、ルールなどを決めた。自分たちで話し合うだけでは分からないことが多く、また企画に対して地域の方がどう思うかを知るため、意見交換会を企画した。



まち歩きの様子

2. 意見交換会の実施

地域の商店会や自治会、行政の方々などに集まっていただき、自分たちが検討しているフォトゲイニングの企画について意見交換会を行った。フィールドワークで発見した課題解決の企画素案を発表後、素案内容等について意見交換をした。自分たちが気づけなかったことや考えなかったことを指摘され、また提案内容が地域のためになること、自分たちがやりたいこと、実現可能なことかなど色々なことを考慮する必要があることもわかり、とても貴重な意見交換会だった。



意見交換会の様子

3. 企画内容の振り返り

意見交換会の最後に参加者にアンケートを実施し、自分たちのふりかえり内容と比較した。参加者意見として比較的多く書かれていたのが、もっと目的やテーマをはっきりさせた方がいい、ということである。このことを重点的に今後話し合いを重ねて企画をブラッシュアップしていきたい。



七夕飾りのお手伝い

これから取り組むべきこと

1. 企画のブラッシュアップ・実現

意見交換会で得た意見を参考に、フォトゲイニングの目的やテーマをはっきりさせ、企画を具体化していく。企画の実現には行政や商店街の方々、その他地域の関係者の協力も必要になるため、その間のコミュニケーションもしっかりととっていききたい。また、今後企画を実現するにはより多くの人に知ってもらう必要があるため、情報発信も重要になると考える。

2. 継続的な意見交換会の実施

今年度の活動で行った意見交換会では、地域の方々の地域のとらえ方や企画に対する様々な意見を知ることができた。また自分たちが清水について学ぶことも色々あり、新しい刺激になった。意見交換会は地域のことや地域の方々の考えを知ることができるとても良い機会であり、今後も企画の実現に向けて、そして地域の現状を知るために継続して行っていきたい。



商店街ニュースに掲載

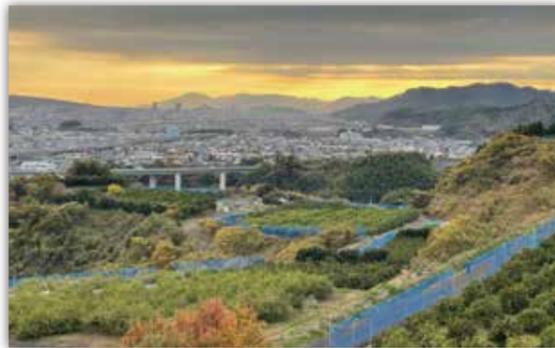
地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化

メンバー
(地域経営) 2年 佐藤啓介
(スポーツプロモーション) 3年 小野田泰地、神原悠輔、木川静、巽文花、山口理生、山地菜月 2年 勝又すず花、藤波千暖、宮川智也、油井菜夏 1年 狩生龍之介、刈谷奈々、法月優衣
指導教員：○准教授 村田真一、准教授 杉山卓也、特任助教 川崎和也
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
公益財団法人静岡市まちづくり公社
庵原地区連合自治会

地域概要

庵原地区は、静岡市清水区の北部に位置する。自治会数は12地区、人口は約1万人、総世帯数は約3千世帯数である。庵原球場や清水ナショナルトレーニングセンター(以下、トレセン)、山切ゴルフガーデンをはじめとするスポーツ施設が充実しており、プロサッカーチームやプロバスケットボールチームなどの合宿・キャンプ地として活用されている。庵原地区を囲うように森林が自生し、山切川が流れているなど自然が豊かである。また県内の中でも特にお茶とみかんの生産が多く、茶畑とみかん畑が広がっている。ここから庵原地区は豊かな自然環境下で「食」「スポーツ」文化が充実しており、地域資源として考えることができる。近年静岡市全体で人口の流出、高齢化が問題になっているが庵原地区もこれらの問題を抱えている地域の一つである。問題解決のため、シニア層に注目した施策やそれらに通ずる魅力あるまちづくりが求められている。そこで現在、庵原地区では現行のコミュニティ活動に私たちのフィールドワークもその意図に賛同し、「地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化」というテーマに基づいて活動を行っている。



写真：みかん畑から眺めた庵原

これまでの活動

庵原座談会の開催

住民の方々と庵原について熟議するものであり、庵原地区の課題と今後の展望についてフリーディスカッションを実施した。座談会ではトレセンをより住民にとって活用できるようにインフォメーションの工夫・開発が必要であることや子供たちのスポーツ離れが課題として上がり、今後の活動として子供たちが参加できるスポーツ教室の開催数を増やしたり多様な形でそれを流布したりすることを検討した。



スポーツツアーの検討

庵原地区にあるトレセンや庵原球場などを活用したものであり、庵原に住む住民がスポーツに携わるきっかけとなる活動を定期教室やイベントを通して行うスポーツツアーを検討した。座談会が出た課題(スポーツに関わる機会の減少)を解決すべく、スポーツツアーで住民を交えたスポーツの交流を促す目的で企画した。ツアーの内容として体力測定やヨガ・ストレッチ体験、ノルディックウォーキング体験であり、地域活性化に貢献し、地域とスポーツの魅力を探求していくことも目的としている。

2021年度の活動について

アンケート調査

実施期間：令和3年11月10日～令和3年12月17日
回収枚数：3,478
調査項目：①基本情報 ②運動・スポーツの行い方について
③日々の生活意識や活動について
④庵原の活性化やまちづくりに関する意見

アンケートから、組織的にスポーツを行う人は地域満足度が高い結果となる事が分かった。スポーツによるコミュニティ形成を目指す場合スポーツをするタイプに留意する必要があると考えられる。また、単に、スポーツをするだけではコミュニティ形成に至らないと考えられることから、予め、街づくりの意図を理解したスポーツ活動を行う事ができればコミュニティ形成が実現できると考えられる。これからのフィールドワークでは、より地域住民間の交流やまちづくりを意識したものにしていきたい。



スポーツツアー

一昨年に実施した「庵原地区住民に対する運動・スポーツ実態調査」により、スポーツによる地域活性化に貢献するための一つの形としてスポーツツアーを開催した。1.体力測定 2.ヨガ 3.ノルディックウォーキング 4.ランチ という内容で行った。体力測定とノルディックウォーキングは、体力の保持増進を目的に内容を構成し行った。また、ランチではJ-step内にあるレストラン(S.colina)、アンテナショップ「きらり」と連携し、学生で考えたJA清水から取り寄せた「みかん」を使用したデザートを提供した。前回行ったプレツアーは庵原の連合自治会体育会役員の方々にご参加して頂いたが、今回のツアーでは多角的な面からの周知が出来ず、2名の方という少人数での開催となってしまった。ツアーを通して、自分たちの考えた事が裏目に出てしまったり、内容伝達がしっかりと出来ていない、集客が出来ていないなど、様々な改善点が得られる結果となった。その反面、ツアー内で行ったヨガに興味を持ってもらうことができ、参加女性の方のヨガを始めるきっかけとなることもできた。これからも庵原地区住民の方のスポーツを行うきっかけとなるような活動をしていきたい。



スポーツツアーの様子



中部横断自動車開通にともなう道の駅実現に向けた社会実験への参加

庵原地区地域活性化拠点準備会を通して、第1回清水いはらフェスへの参加を予定していた。清水いはらフェスでは、地域内の歴史的な所を参加者とともに回りながらノルディックウォーキングの体験を行う予定であった。

これから取り組むべきこと

道の駅実現に向けた社会実験への参加

道の駅実現に向けた社会実験において、ノルディックウォーキング体験のサポートを行う予定である。

「庵原地区スポーツ全戸調査」の分析

アンケートを詳細に分析、考察し、庵原地区のスポーツ基盤づくりに貢献するために、有効と思われる取り組みを議論し、実行に移していきたいと考えている。

メンバー
 (地域経営) 2年 武田小真智、中野萌、1年 山口誠人
 (地域共生) 3年 出木美沙緒
 (アート&マネジメント) 4年 濱嶋ななみ、3年 渡邊紗也佳、1年 外木未夏、日名子ゆり
 (スポーツプロモーション) 2年 西村実紗
 指導教員：○特任教授 平岡義和、講師 原瑠璃彦
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 静岡おまちバル実行委員会

2021年度の活動について

◆おまちバルでの活動

今年度は「オール静岡春バルWeek」(2021、春)に参加し、学割チケットの販売とフライヤーの作成、Instagramでのプロモーション、例会への参加や抽選会のお手伝いをさせていただきました。これまでのおまちバルの課題であった若年層の参加者を増やすことを目標に、静岡県立大学や常葉大学の学生とチームを組んでより多くの学生や若者に向けてプロモーションを行った。フィールドワークメンバーが直接学割チケットを販売する場を設けて、大学生のバル参加を促進した。学生や若者がおまちバルに興味を持ってもらえるように、フライヤーのデザインやSNSでの発信内容は学生が中心となって企画・デザインを行った。抽選会では会場の設営から参加し、入り口での検温・消毒の声掛けやアンケート用紙の配布などを行った。学生主体での活動の幅が増え、更に深くおまちバルの活動に関わることができた。



2021年春のオール静岡春バルWeekの学割チケットのフライヤー

◆静岡クラフトビアバルでの活動

秋に開催予定だったバルが中止になったことを受け、2021年11月から静岡クラフトビアバルでの活動に参加させていただいた。クラフトビールについてより多くの人に知ってもらうために、静岡市内の3つのクラフトビール醸造所(ブルワリー)に取材を行い、記事作りに取り組んだ。醸造所ごとに3グループに分かれて自分たちで質問を考え、実際に醸造設備を見学するなどして、クラフトビールづくりに携わる方々の熱意にふれることができた。取材後は大学生目線でクラフトビールの作り手の魅力が伝わるようにインタビューの内容をまとめながら、分担して記事作りを行った。作成した記事は静岡クラフトビアバルのホームページにて「静岡のクラフトビール探検プロジェクト！静岡地域創造学環メンバーによるブルワリー取材」(<https://www.shizuokacraftbeerbar.com/>)として掲載していただいた。この取材・記事作成を通じて得られた経験を活かして、今後のプロモーションでも飲食店への取材などを行っていききたい。



学生が醸造所を取材の様子

これから取り組むべきこと

2022年春に開催予定のオール静岡春バルWeekへの参加などを通じて、バルイベントの運営に関する知識を深め、2022年度中に学生主体のコンセプトバル開催を目指す。2022年の春のバルでは初めて店舗担当として実際にバル参加店に案内や連絡を行う役割を担う。様々な角度からイベントの運営に取り組むことで、バルの魅力若者に向けて発信する学生主体でのプロモーションに活かしていきたい。具体的には、学生が運営するInstagramアカウントのフォロワー獲得と発信内容・回数の強化や学割チケットの販売数の増加を目指して、2022年春のオール静岡春バルWeekでは静岡県立大学など他大学の学生とも協力しながら活動を行っていく。

地域概要

◆静岡おまちバル

おまちバルとは「おまち」と呼ばれる呉服町、両替町、七間町、常盤町、紺屋町などの静岡駅周辺を中心に開催されるイベントである。静岡市に飲食店が多いことに着目し、それらを地域資源として捉え、ブランディングによる地域振興を目指している。2020年以降は、オール静岡として草薙くいだおれ祭り、清水みなとまちバル、用宗バルと連携して共同開催を行っている。



これまでの活動

このフィールドでは2020年度まで駒形通商店街でも活動を行っていたが、2021年度からはおまちバルでの活動に専念することになった。

◆2019年のおまちバルでの活動

静岡のおまちで毎年2回開催されている「静岡おまちバル」の実行委員会の方々に大学に招いて事前学習を行ったのち、静岡おまちバル(2019、秋)に参加した。その後、学生主体のコンセプトバルを行うことを目標に設定し、次のおまちバルに向けた実行委員会の例会へ参加し、おまちバルの活動に加わりながらイベント開催に向けて学びを深めた。

◆2020年のおまちバルでの活動

おまちバルの例会に参加し、イベント開催に向けて学生ができる活動を提案したり、アドバイスをもらったりして学びを深めた。また、おまちバルが抱える「若い世代の参加客が少ない」という課題を解決するため、学生によるチラシの配布や学割でのチケット販売などの方法を提案した。実際に学生で案を出してチラシを作成するとともに電子ブック作成の手伝いを行った。イベント当日は、学生としておまちバル(2020、秋)に参加するとともに抽選会の手伝いなどといったイベント運営を経験した。運営側と参加者側の両者の立場でイベントに参加することで、準備の苦労や参加しての感想などから見えてくるものもあり、課題解決とコンセプトバル開催に向けて視野を拡大することができた。



おまちバル抽選会の様子(2020、秋)



おまちバル体験

静岡市 浅間通り商店街

浅間通り商店街のにぎわい創出

メンバー
 (地域経営) 3年 増田未夢、山梨純伶、2年 増田裕奈、三浦真、
 1年 上村崇
 (地域共生) 2年 嶋村安純、1年 井出綾乃
 (アート&マネジメント) 3年 上倉朋子、高橋美貴、萩原亜祐美、1年 鈴木唯心、柁木彩花
 指導教員：○特任教員 平岡義和、准教授 川原崎知洋
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 静岡浅間通り商店街振興組合

2021年度の活動について

動画班と取り組み班にフィールドワークメンバーを分けて活動を行った。

街歩き

上級生が新メンバーの1年生4名に対し、浅間通り商店街と浅間神社の紹介を行った。浅間通りにゆかりのある山田長政の歴史や、商店街のお店、神社のご利益などについて、初めて商店街に訪れたメンバーに分かりやすく説明した。街歩きをしていると、商店街の方が歴史について説明してくださり、新メンバーだけでなく上級生も商店街への知識を深めることが出来た。



街歩きの様子

足元灯ディスプレイデザインの制作・設置

足元灯とは商店街に16個ある、腰位の高さの足下を照らしてくれる照明器具で、その上の部分には物を設置できる展示台がある。そこに設置するディスプレイデザインの制作を行った。最初にデザインを行い、次に印刷、最後に組み立てて完成となる。組み立て時は綺麗な装飾品を作ることが出来るよう気を付けて、取り組み班全員で制作している。設置時には、足元灯の掃除をしてから飾り付けをした。設置していると、商店街の方やお客さんから「綺麗だね」などと声をかけていただいた。昨年度は、次こそは長政祭りを行いたいという商店街の願いを込めた飾りと雛飾りの2つを制作した。今後も人に注目してもらえるような華やかなディスプレイデザインを提案していきたい。



長政祭り開催を願う飾り

動画制作

2021年5月21日にYouTubeに「せんげんFWプロジェクト」という浅間通り商店街を紹介するチャンネルを開設し、足元灯ディスプレイデザインの活動内容と浅間神社に初詣に行った時の動画を投稿した。コロナ禍で長政祭りや輪くぐりさんなどのイベントが中止になったために、昨年度のフィールドワーク活動が少なかったと思われる。活動の際には写真や動画を撮ることを意識しながら動画制作に生かしていきたい。



初詣の動画

地域概要

浅間通り商店街は、静岡市中心部に位置する静岡浅間神社から、駿府城公園方面の中町交差点までを結ぶ600メートルの「浅間通り」に存在する。歴史ある老舗店から新しいお店など色々なお店が建ち並んでいる。かつては浅間神社の門前町、または駿府城下町として静岡の産業、流通の中心地であったが、百貨店やコンビニの進出、通信販売の普及などによる客の減少で20年ほど前から衰退が始まっている。平日の昼間でも人通りは少なく、シャッターが下りたまの店もある。

しかし、毎年秋には静岡とタイの交流事業としてこの地に生まれタイに渡って活躍した「山田長政」にちなんだ長政祭りが開催されており、多くの観光客が訪れる。また、毎月1日に浅間神社で行われている安倍の市や、元旦の商店街は地元の人が集まり賑わい創出の場となっている。



元旦の商店街

これまでの活動

長政まつり

日本とタイの交流の架け橋となった浅間通りにゆかりのある山田長政にちなんで行われている祭りで、毎年10月に開催されている。

2019年の長政祭りでは、子ども広場という遊び場を運営し、チョークを使った「地面におえかき」やタイの遊びなど子どもたちが楽しめる企画を行った。



長政祭りでの地面におえかきの様子

輪くぐりさん

浅間神社で無病息災を祈るために行われる「夏越大祓式・大茅の輪くぐり」にあわせて、浅間通り商店街では輪くぐりさんが開催されている。輪くぐりさんでは大道芸など様々なイベントが行われ、多くの人で賑わっている。

2019年のフィールドワーク活動では、商店街の事務所をお借りして子どもを対象とした七夕飾り企画を行った。



輪くぐりさん時の商店街の様子

これから取り組むべきこと

イベントの企画

今年度は、輪くぐりさんが6月30日(木)に開催される予定だ。現在のフィールドワークメンバーは輪くぐりさんを経験していないため、一から企画などを考えなければならない。密集せず、お客さんが楽しめるような企画を考えたい。

足元灯ディスプレイデザインの継続

昨年度、長政祭りとひな祭りに合わせたディスプレイデザインを制作した。これからどのくらいの頻度で更新するか、どんなデザインにしていくかなどを考えていきたい。また、ディスプレイデザインの制作者が分からないという意見を頂いたため、今回は「静岡大学浅間通りフィールド」といった内容の記載をした。

動画制作

昨年度、YouTubeに「せんげんFWプロジェクト」というチャンネルを開設し、浅間通り商店街を紹介する「せんげんさんぽ」という動画を制作した。「せんげんさんぽ」をより気軽に見てもらえるようにすること、子どもも大人も楽しめる内容にすること、またチャンネルのアイコン、バナーのデザインを更新することを目標に、随時SNS等を使いながらチャンネルをPRしていきたい。

焼津市 浜通り

地域住民と高校生との交流に基づいた地域づくり活動

メンバー
 (地域経営) 3年 佐々木啓人、武田菜奈、2年 芝原一貴、仲宗根利恵、
 1年 三村花
 (地域共生) 2年 松本侑、1年 田畑晴花
 (スポーツプロモーション) 3年 山口みどり、1年 小名陽日、長瀬裕哉
 指導教員：○准教授 太田隆之、教授 橋本誠一
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 焼津市行政経営部政策企画課
 焼津市交流推進部観光交流課
 NPO法人浜の会
 静岡県立焼津水産高等学校
 やいづ観光案内人の会

地域概要

浜通りは、駿河湾沿岸に沿った街道を中心に形成された、南北に1kmほど続く集落である。集落内には、かつて運河としても機能した堀川が北へと流れている。北浜通・城之腰・鯛ヶ島の3地区に分かれおり、魚商人が築いてきた沿岸部特有の伝統的家屋や小路などの焼津の歴史と文化が豊富にある地域である。

例として、明治時代に怪談小説で名の知れた、小泉八雲が滞在し多くの作品をこの地に残した。また、歴史的資産だけでなく、地区ごとの夏祭りや「あかり展」などの伝統的な行事が多く存在しているが、人口減少や少子高齢化の影響から、参加者が減少傾向となっており、存続が危惧されている。

浜通りの町並みの保存や活性化を目指して浜通り活性化フォーラムが組織され、活動が行われている。



焼津市浜通りの様子

これまでの活動

- ①「あかり展」の参加
- ②浜通りのまち歩き

①「あかり展」の参加

毎年夏に行われる「あかり展」の準備並びに本番に参加した。これは市民、観光客どちらも楽しめることを目的としたイベントである。市民と学生が手作りしたあんどんや竹灯ろうを通りの脇に展示し、あかりを灯す。焼津フィールドワークでは、あかり展を開催するにあたって地域住民と交流しながらあんどんの和紙の貼り付けや来場者に対して浜通りの印象のアンケート調査を実施してきた。

しかし2020、2021年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により開催が中止となった。

②浜通りのまち歩き

1年生を迎えて、浜通りをNPO法人「浜の会」の方とまち歩きを行った。

焼津市の水産業や歴史を学ぶと共に、浜通りの閑散とした現状を知り、こうした状況を課題点として取り上げた。



あかり展の様子

2021年度の活動について

- ①浜通りを含むサイクリングコースの体験
- ②伊東市と御前崎市のワーケーションの取り組みを見学
- ③ゲストハウス「帆や」の滞在、夜の浜通りまち歩き
- ④焼津水産高校の学生とインスタ映えスポットの探索



ゲストハウス「帆や」の様子

①浜通りを含むサイクリングコースの体験

浜通りや海岸沿いを含むサイクリングコースを実際にレンタサイクルで周った。海岸沿いには富士山が見えたり、ハート型の写真映えスポットがあったりと新たな焼津市の魅力を発見することができた。

②伊東市と御前崎市のワーケーションの取り組みを見学

新型コロナウイルス感染症が蔓延することで観光客数が減少するとともに、テレワークの需要が高まっていたことに注目し、ワーケーションに乗り出した伊東市と御前崎市の皆様からこれまでの取り組みについて話を聞かせていただいた。伊東市と御前崎市のワーケーションでは、市が抱える課題解決を視野に入れながらの話だった。2つの市の話を聞くことで改めてワーケーションの在り方の多様性を身をもって経験することができた。

③ゲストハウス「帆や」の滞在、夜のまち歩き

ゲストハウス「帆や」に滞在し、しずおか焼津信用金庫の方に浜通りの歴史などについて話を伺うとともに、ワーケーションや宿泊するにあたっての課題点や今後の帆やの活用方法を議論した。また夜の浜通りをまち歩きをすることで街灯の少なさや車の通りなど現状と課題点を発見した。

④焼津水産高校の生徒とインスタ映えスポットの探索

若者をターゲットとして、浜通りのインスタ映えスポットを焼津水産高校の生徒の皆さんと探索し、実際に写真を撮った。レトロな雰囲気やカツオのイラストの壁などを使ってインスタ映えできるような場所を見つけることができた。

これから取り組むべきこと

2021年は、浜通りのまち歩きを行うとともに、ほかの地域のワーケーションの取り組みについて学んだ。そこで今後の活動では、これらの活動で得た学びや情報を整理し、浜通りの活性化にどのような取り組みをしていくかを考え、実際に浜通りで実践する必要がある。そこで、今後は以下のようなことを行う。

- ・まち歩きで得た浜通りの情報、伊東市と御前崎市におけるワーケーションの話から得た地域の課題の解決や地域活性化について学生間で考える。
- ・浜通りとほかの地域との違いを考え、浜通りの長所と短所を考えることで「帆や」をベースにした活性化に向けた取り組みを考える。
- ・「あかり展」の時に賑わう浜通りをほかの時期でも人を集めるためのアイデアを考える。

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、毎年参加していた「あかり展」に参加することもできず、活動しにくい部分も多い年だった。しかし、今までの活動で学んできたことを活かして今年の活動では、実践を試みようと思っている。地域住民との交流など今までできていなかったことを今年の活動に取り入れ、昨年は学びを蓄える年として考え、これからの活動に取り組んでいく。

メンバー

(アート&マネジメント) 3年 半田颯太、松本愛子
2年 中野真白、増元明日葉
1年 田中奏大

指導教員：○講師 占部史人、講師 立花由美子
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

公益財団法人浜松市文化振興財団浜松文芸館

地域概要

浜松文芸館は、平成27年4月よりクリエート浜松内の4階および5階フロアの一部に移転し、リニューアルオープンした施設である。館内では浜松市や遠州地方ゆかりの文芸作家の資料を収集・保存しており、郷土の生んだ優れた文芸作家の業績を次世代へと引き継ぎ市民文化の向上を図るため、これらの文芸人の収蔵品の平常展・企画展を開催している。また、俳句、文学史、言葉などの広い文芸分野をテーマにした講座の開催を通じて、「身近に文芸を学ぶ・楽しむ場、文芸に触れ多くの人々と語り合う場」にふさわしい環境づくりを進めている。



クリエート浜松外観

これまでの活動



①広報活動

浜松文芸館の知名度向上を目的として、ポスターやチラシの作成を行った。特にポスターは新聞にも掲載され反響を呼んだ。

②ワークショップの開催

若者に文芸の楽しさを知ってもらうために、2つのワークショップを開催した。対象を年齢ごとに分け、中高生には合作俳句、小学生には宝探しや物語の穴埋めを中心とした企画を行なった。

また、言葉に対して親しみをもってもらうために、「七夕と俳句」をテーマにワークショップを開催した。小学生が考えた願いのこもった夏の俳句を、短冊に書いて飾るというイベントで、子どもたちに俳句を楽しんでもらうことができた。

③俳句ガチャの設置

「俳句ガチャ」とは、「合作俳句」を気軽に体験できる企画である。クリエート浜松の1階と5階にガチャを設置することで、浜松文芸館への来場者を増やすことができた。リピーターの獲得もでき、今後も続けていく予定である。また、ガチャに使われる季語カードは、季節ごとに新しいカードを追加している。

④オリジナルキャラクターの作成

浜松文芸館のキャラクターとして、「俳人(はいと)くん」と「ことばちゃん」を作成した。俳人くんは等身大パネルも展示されている。

⑤クリアファイルと冊子の作成

浜松文芸館や合作俳句、オリジナルキャラクターの説明が載っている冊子と、冊子の表紙が動いて見える「スリットアニメーション」を楽しめる仕組みのクリアファイルを作成した。



活動をまとめた展示



作成した冊子

2021年度の活動について

オリジナルワークショップ『吟行DEススメ!』開催に向けて

①文芸館主催のワークショップに参加

文芸館主催ワークショップのお手伝いをさせて頂いた。お手伝いを通して、オリジナルワークショップにおける改善点や注意点についてフィールドワークメンバーでディスカッションを行った。

②ワークショップの提案

前期は主な活動として「浜松市内の探索」を行った。探索を行う中で、浜松のまちの魅力について理解を深めることができた。

そのような経験から、「浜松市内を探索して魅力を感じたものを、俳句として詠む「吟行」」をテーマとしたワークショップが提案された。

③ワークショップ開催に向けての準備

◆ワークショップの詳細についての話し合い

テーマ：吟行×浜松×マップ作り

ターゲット：親子（小学生と保護者）

目的：子供達に吟行を通じて文芸に触れてもらうこと。また、浜松の探索を通して地元の魅力を再発見してもらうこと。

◆ワークショップで用いるマップフォーマットの作成

子どもたちの個性をどのようにしてマップ上に引き出すのかや、子どもたちが作りやすいマップにするにはどのようなデザインのマップを作成すべきなのかを、何回もの修正を繰り返し研究した。

また、フィールドワークメンバーでマップのフォーマットを使って、実際にワークショップを体験してみることで、改善点や良かった点などを確認した。



ワークショップの詳細説明書

④ワークショップの実施

これらの準備を経て、実際にワークショップを実施した。

⑤ワークショップの振り返り

実際にワークショップを行ってみての良かった点や反省点を、フィールドワークメンバーで話し合った。

◆良かった点

- ・地元の子どもたちと一緒に浜松市内を探索することで、浜松の新たな魅力を発見することができた。
- ・その発見を俳句として表現することで、子どもたちが楽しく文芸に触れてもらうきっかけとなった。

◆反省点

- ・アンケートを用意し、参加者の意見を聞くことでより良いワークショップにしていく。
- ・参加者を集めるための広報の仕方を考える。
- ・活動内容の詳細を伝えづらかったことや、会場の準備が遅れてしまったことなど、事前準備が足りなかった。
- ・あらかじめ設定していた時間を大幅に超えてしまったことにより、進行が遅れてしまった。



参加者が作成した吟行マップ

これから取り組むべきこと

①ショーケースの設置とこれからの活動

ワークショップで行った活動をまとめた展示を、文芸館のショーケース内に設置する。

活動を行うだけで終わってしまうのではなく、フィールドワークでどのようなことを行っているのかを、浜松市民の方に「知ってもらう」ことが重要である。これからの活動では、コミュニティを広げていくことも重要視していきたい。

②フィールドテーマの変更

「私のまちの文芸世界」

上記にも記したようにこれからの活動は、今まで以上に外へ出ていくような活動となる。そこで、浜松での文芸体験を通じて視野が広がり、今までは見つけることのできなかった新たな魅力を普段の生活の中で発見することを期待する。また、「俳句」など一つの目標にとらわれることなく、様々な体験が可能になるようなフィールドテーマを新たに設定した。

浜松市 佐久間町

交流の輪づくり～新たな関係構築～

メンバー
(地域経営) 3年 清水良香、2年 齋藤しずく、竹田有那
(地域共生) 3年 伊藤響、河合美智香、1年 河野未奈
(アート&マネジメント) 3年 服部翔子、2年 落合歩美、
1年 大草実優、眞野瑤子
指導教員：○教授 河合学、教授 江口昌克、准教授 祝原豊、
准教授 山本崇記
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
浜松市天竜区佐久間協働センター
佐久間パンプキンレディース
浜松山里いきいき応援隊（地域おこし協力隊）

地域概要

佐久間町は、1956年に昭和の大合併によって1町3村を合併して誕生した。さらに2005年に浜松市と合併して現在の浜松市天竜区佐久間町となっている。人口は2847人(令和4年4月1日現在)である。国内最大級の佐久間ダムが有名な地であり、自然に囲まれたのどかな地域でもある。アクティブに活動する方が多く、NPOや地域団体の活動が盛んに行われている。中でも地域最大のイベントであるフェスタさくまは、新型コロナウイルスの影響で近年はオンライン開催となっているが、地域の名産品などが並び大きな盛り上がりを見せる。少子高齢化や人口減少などの課題を抱える中でも人の温かさを感じ、地域内の交流が盛んな一体感のある地域である。



佐久間の風景

これまでの活動

【交流の輪づくり】

佐久間の地域に関わっていく中で出会った方々と積極的に交流させていただいた。佐久間の女性食品加工グループのパンプキンレディースの方々や地域の方々とのイベントや交流活動を通して、関係性を築いていけるように実行してきた。

【サクッとさくまの制作の継続】

佐久間の魅力、情報、また私たちの活動などを記載した広報誌サクッとさくまを制作した。掲載するインタビューの取材、記事の制作を行った。完成後は佐久間の図書館や交流センターなどに設置させていた。

【SNSの広報】

Instagramにて広報活動を行った。ターゲットを地域創造学環の大学生や地域創造学環を志望する高校生と定めて、見る人にとって有益な情報になるよう記事内容を工夫して活動を実行した。

【地図の制作】

情報の整理が必要であるとして地図上で佐久間についての取りまとめを行った。



パンプキンレディースさんの活動



Instagram、サクッとさくま

2021年度の活動について

2020年度は新型コロナウイルス感染拡大により現地での活動が困難であった。そのため2021年度は実際に佐久間に赴き、現地の方と交流することを通して活動を進めていくことを目標とし、「交流の輪づくり～新たな関係構築～」をテーマにオンラインも交えつつ活動を行った。

【佐久間巡り】

佐久間で活躍されている山里いきいき応援隊の山田恵美莉さんの案内のもと、佐久間の街歩きを実施し、さらに佐久間ダムなど佐久間の魅力的なスポットを巡った。



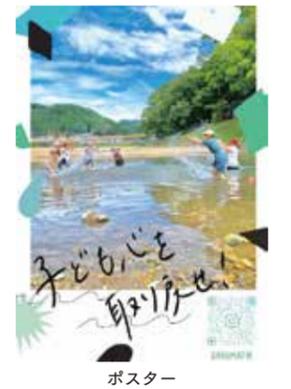
豆こぼしクリーン大作戦の記念写真

【関係構築と交流】

山里いきいき応援隊の方や天竜川の清掃イベント「豆こぼしクリーン大作戦」で出会った佐久間出身の中学生や大学生、さらには大学生の方と新たに関係を構築することが出来た。イベント後もオンラインでのインタビューを受けていただき佐久間への想いや、暮らしの中の魅力についてのお話を伺うことが出来た。パンプキンレディースとも継続的な交流をさせていただいた。幅広い世代、様々な立場の方々と共に活動をし、会話を重ねることで次年度につながる交流の輪を築くことが出来た。

【サクッとさくま・地図・ポスター制作】

2021年度のサクッとさくまでは、佐久間に住む人に注目したインタビュー記事を掲載したり、自然に注目して滝や川などの観光スポットについて特集を組んだり、一つのテーマに対して深く情報を掘り下げた。またフィールドワークで訪れた場所や感じた魅力を紹介する地図とポスターを制作した。



ポスター

【SNSの広報】

投稿内容に関連する事だけではなく、ターゲット層について考えるなど運営についても話し合いを行った。

これから取り組むべきこと

2021年度は現地で活動することや、人を紹介していただくことを通じて活動テーマ「交流の輪づくり～新たな関係構築～」を達成することができた。実際、この一年で出会った方からイベント参加のお誘いを頂いたり、今後について話し合うことができ、将来性のある関係を構築できたと考える。しかしその半面、現地の方に佐久間の案内を引き受けていただいたり、イベントに参加させていただくことが多く、主体的な活動をあまりできなかったと感じた。広報活動に関しては、広報誌、SNS、ポスターなど広報手段を増やし、また内容も洗練することができた。

昨年度の活動を踏まえて今年度取り組むべきことは、これまでの交流の輪づくりでつながることのできた佐久間の方々主催するイベントの運営や取り組みに協力することだ。信頼関係を構築・維持していくとともに、そうした活動がさらに盛り上がるようお手伝いもしていきたい。また信頼関係が構築されていることを前提として、私たち自身でフォトコンテストを開催したり、これまで参加した取り組みの中で新たな企画を提案・運営していくことも視野に入れている。

広報は今後、これまでの活動を継続することに加え、現状の読者やフォロワーの把握や効果的な設置場所の考察など「分析」の部分に力を入れていきたい。また佐久間の民話を取り入れるなど新たな展開も目指す。

「外部から来た大学生」である私たちは、現地に住んで実際に活動する方々と同じような佐久間に密着した活動を行うことは困難である。しかし外部の大学生だからこそその視点やできることを明らかにし、私たちにしかできない取り組みを行いたい。具体的には地域づくりの担い手と住民、そして学生間で相互にメリットのある交流の輪を作り上げ、深め、広げたいと考えている。

子どもたちを呼び込むための環境づくり

メンバー
 (地域経営) 3年 矢五田萌加、1年 川野桂汰
 (地域共生) 3年 秋山航、清水彩香、2年 生駒亮仁、1年 阿部ひなた
 (地域環境・防災) 2年 村岡蒼汰
 (アート&マネジメント) 3年 芳村日苗、2年 舟山海里
 (スポーツプロモーション) 4年 嶋村浩直、3年 漆畑奈々花、2年 宮本幸輝、
 1年 三國花、宮下真彩
 指導教員：○特任助教 川崎和也、教授 池田恵子 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 NPO法人とうもんの会
 蓮舟寺の皆さん

地域概要

「田園空間博物館 南遠州とうもんの里 総合案内所」(以下**とうもんの里**)は、掛川市の南西部にある施設である。掛川市・袋井市・磐田市の南部に広がる田園地帯を「とうもん」と言う。「とうもん」は、稲面と書いて「とうも」、あるいは、田面と書いて「たおも」がその由来とされている。四季折々に見せる田んぼの美しい風景や、地域の方々の温かさ、そして豊かな自然環境から生まれる多様な生態系がとうもんの里の大きな魅力である。

とうもんの里を管理するのが、2006年に地域住民らが中心となって設立した「NPO法人 とうもんの会」である。とうもんの会は、**とうもんの里**を拠点にして、農業体験、食加工体験、地域文化のPRやイベント企画、地域の農水産物・加工品のPR販売などの活動を行っている。こうした活動を通じて、地域の農業や農村の魅力や、**とうもんの里**を訪れる人々とのかかわりを創り、農業の保全や地域の活性化につなげていくことを目的としている。



とうもんの里の風景



フィールドワークのメンバー

これまでの活動

田園風景の保存と農村の伝統文化の継承などを目的に活動をするとうもんの会では、「**農業を知らない子どもたち**」を活動のターゲットのひとつとしているが、次世代を担う子どもたちをいかに巻き込むかが大きな課題のひとつである。こうした課題を背景に、とうもんの里フィールドワークでは、「**子どもたちを呼び込むための環境づくり**」というテーマを掲げて、フィールドワークに取り組んでいる。



横須賀まち歩きの様子

横須賀まち歩き

フィールドワークに加わった1年生が、とうもんの里の近郊にある横須賀地区を探索し、地域の自然や文化を肌で感じた。自身の地元との違いなどさまざまな気づきを得る機会となった。

遊具製作

自然のものを活かして、子どもたちが遊ぶための昔ながらの遊具(竹馬、竹ぼっくり、竹水鉄砲など)を作製した。定期的に補強をしながらとうもんの里を訪れる子どもたちがいつでも遊べるようにした。



キッズフェスの様子

キッズフェス

子どもたちがとうもんの里の魅力を楽しみながら感じてもらうため、子どもたちがとうもんの里周辺を探索し、発見した生き物を観察、絵を描いて図鑑を作成する「**とうもん図鑑**」や、自然を活かした遊び場を提供する「**きーもんらんど**」などのイベントを企画し開催した。

買い物動向調査

とうもんの里を訪れたお客さんへのアンケート調査や駐車場の利用状況に関する調査、また、農家さんへのアンケートなどを行い、とうもんの里を支える仕組みについて学んだ。



買い物動向調査の様子

2021年度の活動について

私たちは、「子どもたちを呼び込むための環境づくり」のために、今まで子ども向けのイベントを企画・実施してきた。しかし、子どもたちの多くは1人ではなく、親と一緒にとうもんの里を訪れるにもかかわらず、その対象を子どもたちだけに限定してきた。また、これまでの取り組みは、私たち学生だけが主体となり、とうもんの会の方々には補助的な役割をお願いしてきたが、子どもたちを呼び込むための環境づくりを持続的なものにするためには、とうもんの会の方々も巻き込むことが必要であると考えた。

これらの反省を踏まえて、2021年度は親子で楽しむことができ、かつとうもんの会の方々を巻き込むイベントを企画することにした。

地域理解・地域資源の探究

生き物調査

とうもんの里の周辺に生息する生き物や植物の調査を行った。その成果をイベントにうまく繋げられるように意識して、生き物の写真を撮影したり、特徴などを図鑑で調べたりして、生き物カードを作成した。また、子どもならどう行動するのか、どういう風を楽しむのかなどを考えながら調査を行った。

夏色ウォーク

夏色ウォークはとうもんの会が企画運営するイベントである。とうもんの里を出発し、とうもんの里の近郊にある歴史的な場所や地域の重要な場所を訪問し、地域の理解を深める。私たちもこのイベントに参加し、地域の歴史や自然環境についての理解を深めるとともに、そこで学んだことを自分たちの企画イベントにどのように活かせるか探求した。

イベントの企画の構想・準備

オンラインや対面によるミーティングを行い、イベントへの話し合いを重ねた。現地で活動する時間には限りがあるので、とうもんの里でしかできないことを整理し、現地実習以外の時間も活用したり、とうもんの会の方と相談したりして、「**とうもん図鑑**」というイベントの企画を構想し、その準備に取り組んだ。

とうもん図鑑

子どもたちに自然の中で遊ぶことが楽しいという気持ちを感じてもらえるような「**とうもん図鑑**」を実施した。主に、これまでの観察・分析結果を活かし、生き物探し・図鑑作り・生き物マップ作りをした。子どもと学生がパディを作り、見つけた生き物についての知識を教えてあげたり、一緒に図鑑で調べたりした。また、学生はイベントを進めていくのと同時に子どもたちの言動を観察し、子どもたちを呼び込む環境づくりへつなげていくイベントになった。感染対策を十分に行いながら、子どもたちだけでなく親御さんも一緒に楽しめるようにイベントの構成やしおりの作り方などに工夫を凝らした。さらに、今後とうもんの会の方々にも「**とうもん図鑑**」を実施していただきたいという思いで、イベントに積極的に参加していただき、協力して取り組むことができた。



生き物調査の様子



とうもん図鑑の様子



イベント当日の様子



話し合いの様子

これから取り組むべきこと

① イベントの企画・実施

今年度は、2021年度以上に子どもたちを呼び込む環境づくりを達成できるようにするために、学生たちがより主体的にフィールドワークに取り組み、イベントを企画・実施をする。

② 地域を巻き込む活動の実施

私たちが地域社会に参加していくことに加え、私たちの活動に地域の方々を巻き込んでいくことで地域社会のさらなる発展に貢献していく。

③ 個人の興味を深める活動の実施

これまでチームで様々な活動に取り組んできたが、今年度からは個人が様々な視点でとうもんの里や周辺地域に興味を向け取り組む活動にもチャレンジする。その活動を通して個人の成長とともに、個人の成長をチーム全体の成長につなげることができるように取り組む。

メンバー
(地域経営) 2年 川村優和、杉山愛、脇坂大陸、1年 伊東錠太郎
(アート&マネジメント) 3年 永島幸奈
(スポーツプロモーション) 3年 島田朱諒、辻夢美、間下桃子
2年 府川駿介、宮崎紳士郎
1年 石川青空、鈴木杜悟、三谷柊次
指導教員：○特任助教 川崎和也、教授 水谷洋一、准教授 村田真一
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
御前崎市総務部企画政策課
一般社団法人しずおかスポーツプロモーション
御前崎市観光協会

地域概要

静岡県内陸部最南端に位置する御前崎市は、人口31522人（令和3年3月末）の自治体である。2004年4月1日、御前崎町と浜岡町が合併して御前崎市が誕生した。市内には「浜岡砂丘」や「御前崎灯台」のほか、「御前崎マリンパーク」「海鮮なぶら市場」「渚の交番」「あささわふる里公園」など、さまざまな名所・施設がある。また年間日照時間が国内で最も長いなど、地理的特徴等を活かしたスポーツも盛んで、ウィンドサーフィンの世界大会も開催されている。

御前崎市もまた人口流出に伴う人口減少、少子高齢化、地域経済の縮小・衰退などの諸問題に直面している。2045年には住民の5割近くが65歳以上の高齢者になると予想され、その結果、御前崎市の第一次・第二次産業の担い手が不足し、さらに地域コミュニティの希薄化などの問題も懸念される。それらの問題に対して、御前崎市では、①『活力』ある仕事・人材づくり、②『魅力』ある発信・交流づくり、③『希望』ある子育て・活躍の場づくり、④『安心』ある地域づくりの4つを基本戦略に掲げて、市民・行政・企業などが連携しながら、地域づくりに取り組んでいる。

これまでの活動

私たちは「御前崎スポーツ振興プロジェクト」の連携先のひとつとして、2018年10月から御前崎市内でフィールドワークを行っている。「御前崎スポーツ振興プロジェクト」は、内閣府の地方創生推進事業として2018年からスタートした事業である。市民・学生・企業・団体・行政などが連携し、御前崎市のスポーツ環境を活かして、交流人口の拡大、地域経済の活性化、市民活動の活性化、市民の健康増進などを図ることを目標としている。「御前崎スポーツ振興プロジェクト」の取り組みは、内外で高く評価されており、2021年にはスポーツ庁の「スポーツ・健康まちづくり優良自治体表彰2021」において、全国を先導する30の優良自治体のひとつとして表彰された。私たちは、フィールドワークにおいて、御前崎市を訪れて様々な施設・名所を視察したり、現地の方々から話をうかがったりしながら、これまで以下の活動に取り組んだ。

(1) 御前崎市合宿型フィールドワーク（2019年9月25日・26日）

御前崎市で1泊2日の現地実習を実施。私たちが企画する「御前崎市に全国の大学生を集めるためのイベント」を実現するために、自転車で市内の各所を視察したり、私たちの企画について専門家の方々などからアドバイスをいただいたりした。



(2) 「U14御前崎NEXTA CUP2019」のイベント開催（2019年12月29日）

第2回U-14御前崎ネクスタカップで、全国からやって来る中学生たちにとって御前崎市での滞在がよい思い出となるように、キックターゲットの企画・運営および豚汁の提供を行った。

(3) 「おまえざきサイクリヤー」の開催（2020年3月20日）

御前崎市内のスポットを自転車で回りながらポイントやスタンプを集めて競う「おまえざきサイクリヤー」を市や観光協会の協力を得て開催した。計画、予算立て、スポット・景品の交渉などで実践的な学びを得ることができた。



2021年度の活動について

2021年度は昨年度同様、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響によって、御前崎市を訪問する機会が非常に制限され、2022年2月に企画していたフライングディスク体験会も実現することができなかった。しかし、御前崎市を訪問できない間もオンラインを活用するなどして、御前崎市役所企画政策課の方々などと企画の実現に向けた準備を進めてきた。

〈6月12日 フライングディスク体験会〉

フライングディスクを御前崎市民の健康づくりや教育などに役立てることを目標に、フライングディスク体験会を実施し、フライングディスクの活かし方を検討した。御前崎市役所の方々など、市内の各分野の専門家たちに体験していただき、フライングディスクを今後どのように活かしてゆけるのか意見や助言をいただいた。参加者からは「楽しかった」という声を沢山いただいたが、「対象者別にルールを変えてみてはどうか」という意見もいただいた。今回がフライングディスクに関する初めての企画だったため、不安もあったが、企画・運営のノウハウを実践的に学ぶことができ、今後に繋がる経験となった。



〈7月18日 マリンスポーツフェスタ〉

毎年開催される「マリンスポーツフェスタ」に今年度も呼んでいただき、イベントの様々な業務のサポートを行った。実際にカヌー、サップ、水上バイク、バナナボートなどのマリンスポーツも体験することができた。コロナ禍での開催ということもあり、その中でどのようにイベントを運営していけばよいのか学ぶことができた。また、マリンスポーツの楽しさを肌で感じ、マリンスポーツをもっと多くの人に体験していただきたいと感じた。



〈11月3日 御前崎市についての学習〉

1年生にとっては初めての御前崎市訪問ということで、御前崎市にある「浜岡原子力発電所」、「なぶら市場」、「御前崎灯台」、「浜岡砂丘」、「御前崎ネクスタフィールド」を訪れ、御前崎市についての理解を深めた。また1年生と御前崎市役所の方々との顔合わせも行い、御前崎市の現状、課題、地域創生の取り組み、「御前崎スポーツ振興プロジェクト」の取り組みなどについてレクチャーをしていただいた。御前崎市を1日かけて堪能でき、御前崎市の良さを改めて実感することができた。



これから取り組むべきこと

これまで御前崎フィールドでは、御前崎市の外から人を呼び込むことに力点を置いて活動を行ってきた。今後も引き続きこれに取り組む一方で、2022年度は御前崎市の市民をターゲットにした活動の展開を検討している。具体的には、昨年度に引き続き、市民へのフライングディスク競技の普及活動を計画している。これは、「御前崎スポーツ振興プロジェクト」が御前崎市の外からのフライングディスクの競技者や愛好者らの誘致に取り組み始めたことを受けて、私たちが御前崎市の市民に向けて競技の普及に取り組むことで、御前崎市民全体の活性化につなげたいと考えている。そのために、2022年度は昨年度に新型コロナウイルスの影響で実施することができなかった企画を運営し、御前崎市の活性化につなげていくかを検討していきたい。

また、「御前崎スポーツ振興プロジェクト」では、スポーツ合宿の誘致、さまざまなスポーツイベントの企画運営、さらに「フットゴルフ」をはじめとするニュースポーツの普及にも取り組んでいる。2022年度は、こうした活動にも積極的に関わってゆきたいと考えている。

松崎町 商店街

なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出

メンバー
 (地域経営) 3年 金瀧芽生、菅野惇、2年 山本みう、1年 佐藤快成
 (地域共生) 3年 海老名香凛、辻村圭吾、2年 高橋奈那
 1年 赤井佑奈、富樫みさと、村宮汐莉
 (アート&マネジメント) 2年 稲垣望美
 指導教員：○准教授 牛場智、教授 阿部耕也、教授 杉山康司
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 松崎町企画観光課
 松崎町総務課
 松崎町商工会
 静岡県立松崎高等学校

2021年度の活動について

まち歩き

1年生がフィールドワークへ加入する時期に合わせてまち歩きを行いました。まち歩きでは、活動の中心地である商店街をめぐる他、松崎町が誇る、なまこ壁通りや美しい海沿いへも足を運びました。

商店街インタビュー調査

パンフレット作成にあたり、商店街にてインタビュー調査を行いました。インタビューでは、各店舗の店主さんにパンフレットに載せる情報を聞く他、店主さんの人柄を引き出す質問をしました。インタビュー調査で得た情報は実際にパンフレットに掲載する予定です。

パンフレット作成

今年度の主な活動としてパンフレット作成を行いました。松崎町商店街でもパンフレットはありますが、既存のパンフレットではお店の立地が見にくいことやお店の店主さんの人柄が伝わりづらいという課題があり、本年度は松崎町商店街のパンフレットを改良すべく活動を行いました。

地域概要

『花とロマンの里』松崎町

松崎町は静岡大学から車で3時間半、人口約6500人であり、なまこ壁通りや歴史的な建造物が立ち並びます。町を見渡してみると、川沿いに咲き乱れる桜や田んぼを活用した花畑があり、暖かい気持ちになれます。

松崎町は「the most beautiful villages in japan」(日本で最も美しい村連合)の加盟地域です。この連合に加盟することにより、町の美しい景観を外に発信するほか、松崎町の地域資源を再発見することや、町の景観を保護する側面を担っています。

松崎町の魅力は景観だけではなく、松崎町は桜葉の生産量が日本一であり、町のお店には桜葉を使用した料理やお菓子が並んでいます。また、松崎町は海に面していることから、海の幸を堪能することもできます。



なまこ壁通りの様子



桜葉を使ったクッキー

これまでの活動

「好きを咲かせる」

松崎町の魅力や素材が「土」となり、松崎町に関わっている方々が「種」になります。そこへ、私たち学生が加わり、松崎町の魅力を伝えるとともに、課題を発見し解決することで、私たちの存在が「水」となり「種」である松崎町に関わっている方々の「好き」の気持ちを「咲かせる」ことを目的に活動しています。

このテーマをもとにこれまでに以下のような活動を行ってきました。

商店街調査
 商店街の方々との交流やパンフレット作成にあたり商店街の方々にインタビュー調査を行いました。



さくら葉餅

中高生との交流
 松崎中学校、松崎高校の生徒の方々とワークショップを行いました。また、松崎高校の文化祭に参加し展示や企画を行いました。

情報発信
 松崎町の魅力を地域内外に発信するため、観光パンフレット・松崎町PRコンテストの開催を計画しました。(本年度はパンフレット作成に力を入れ取り組みました)

イベントへの参加
 棚田のライトアップイベントや棚田フェス、秋祭り等に参加し、松崎町内外の方々との交流を深め松崎の伝統を体験しました。



テーマイメージ

これから取り組むべきこと

これまでの活動を通して、私たちは松崎町の魅力を知るとともに、町の課題を発見することができたと感じています。今後は、松崎町の魅力を町内・町外に発信するとともに、町の課題解決に取り組んでいきたいと考えています。

○パンフレットの完成

2021年度はパンフレットの作成に力を入れて取り組んできました。今後は、作成したパンフレットを店主様にご確認いただき、修正しパンフレットを完成させていきます。完成したパンフレットについては、松崎町内に置くだけでなく、大学内でも実際に置くことができないか検討していきます。

○新しい取り組みについて考案

2021年度に引き続き、パンフレット作成を行っていきませんが、パンフレット作成に加え、新たな取り組みをしていきたいと考えています。現在のパンフレット作成は学生と店主様が中心となって行っていますが、新たな取り組みでは、松崎町の学生や町民を巻き込んだ活動を行っていききたいと考えています。

最後になりますが、私たち学生を受け入れてくださっている松崎町の方々のご厚意に感謝申し上げます。今後も、微力ながら松崎町の地域活性化の力になれるように、学生として私たちにできることを考えていきます。



まち歩きの様子



町役場の方に施設の説明を受ける様子



店舗調査の様子



作成したオリジナルTシャツ



メンバー集合写真

松崎町 観光と防災

防災と観光の両立

メンバー
 (地域経営) 2年 橋ヶ谷有沙、1年 桂木健伸、木下皓貴
 (地域環境・防災) 3年 更家優和、那須野智大、2年 田丸結珠
 (アート&マネジメント) 2年 川嶋梨花
 (スポーツプロモーション) 1年 山下笑花
 指導教員：○准教授 原田賢治、准教授 山本隆太
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 松崎町企画観光課
 松崎町総務課
 松崎町立松崎小学校
 松崎町立松崎中学校
 静岡県立松崎高等学校
 松崎町西区、中区、北区の皆さん

地域概要

伊豆半島南西部の海沿いに位置する松崎町は、「日本で最も美しい村連合」に加盟しており、なまこ壁、棚田や海岸などの美しい景観を持つことから、観光地として有名な港町である。

海底火山により形成された不思議な地形・海などの自然風景や、国指定重要文化財の岩科学校などにみられるなまこ壁など、見所の多い地域であり、駿河湾に面した豊かな漁場からの海の幸や国内シェア7割を誇る桜葉の塩漬けなど、食の魅力にもあふれている。

しかし、海沿いに位置するため、南海トラフ巨大地震発生時には約7分で最大15mという大きな津波被害が想定されている。町内は細い道が多く、高齢化も著しいことからソフト・ハード面ともに防災施策への取り組みが急務である。



牛原山から見える松崎町の絶景



サステナビリティコース
1年桂木

先生含め全員で登山！
すごく綺麗でした！



サステナビリティコース
2年田丸

巡りきれないほど
沢山の魅力アリ！



なまこ壁通り



国内シェア7割を誇る
「桜葉の塩漬け」



桜と菜の花

(画像：松崎町HPより)

これまでの活動

観光看板案の作成

「松崎町防災マップ」の情報を参考に、既存の観光看板に防災情報を追加した新デザイン案を作成した。観光名所と避難場所が一目で分かるようになり、観光客にも防災知識を付与させることが目的である。また、名所や施設の用途に応じたアイコンを表示することで、視覚的にもより分かりやすいデザインにした。



クチコミ防災マップの作成

松崎町内の住民を対象に避難時の危険箇所や注意すべき点に関するアンケートを実施し、「クチコミ防災マップ」を作成した。集まった情報は「クチコミ」としてまとめ、実際の危険箇所を視察・検証した後にマップ上に記載した。また、マップ裏面には危険を回避するための行動を「避難するときに気を付けたいこと」として図解を示した。



避難訓練での防災講座

2021年3月7日に行われた防災訓練の終了直後、松崎町西区・中区・北区の住民を1箇所のホールに集め防災講座を行った。講座では完成したクチコミ防災マップの配布・説明と、コロナ禍での避難行動で注意すべきことについての説明をした。コロナ禍での避難行動については住民の関心が特に高いように見受けられ、人々が必要としていた情報や知識を伝える機会となった。



2021年度の活動について

各々のコースの知識
を生かして制作！

アート&マネジメントコース
2年川嶋

観光防災マップの作成

観光情報と防災情報が一体となったマップを作成し、アイコンや簡略化した道で観光客が観光地である松崎町をより分かりやすくするとともに、災害時の際に土地勘の無い観光客でもスムーズに避難できるようなマップを目指した。

また、学生が作成した独自のGoogleマップと連携させて、オンライン上での観光情報と防災情報の閲覧を可能にした。裏面には防災施設情報に特化した特集を組み、施設の防災基本情報に加えて施設への避難の仕方や道順を動画・画像にして避難の手助けとなるものになった。

松崎町の熱心な防災情報を観光客にも発信！

完成した観光防災マップと防災施設情報



情報収集のためのまち歩きでつけた松崎の魅力



食事も観光も
フィールドワークならではの
楽しみ！

サステナビリティコース
2年橋ヶ谷

小中学校での防災講座

松崎小学校でDIG、松崎中学校でHUGという防災講座の授業に参加した。HUGでは実践的な避難所での運営の疑似体験を行い、DIGでは災害時の危険箇所や避難方法を理解する目的で行った。小中学生の活発な意見交換が見られる中で、大学生側がかけあける一言のアドバイスが生徒の考えの幅を広げる、気づきを与えるものにもなると思う場面もあった。小中学生に防災についての関心や意識を持ってもらうことができ、大学生が教育に参加してもらうことが良かったという声をいただいた。我々も小中学生と関わることで松崎町の魅力や様子など生の声を聞くことができた。



松崎小学校でのDIGの様子

これから取り組むべきこと

一緒に盛り上げていく
1年生大募集！



サステナビリティコース
1年木下

今後、より「観光」の面に焦点を当て、コロナ禍の観光産業の手助けができるような取り組みをしていきたい。

①松崎町の観光についての実態調査

観光業の人にインタビューをさせて頂くなど、まず地域のニーズや現状を理解していきたい。調査を踏まえてより良い企画を検討していきたいと考えている。

現在の案として、インスタグラムで松崎町の魅力を発信したり、PR動画を作成させていただいたりすることなどを考えている。

②地域の子どもたちとの交流、防災への関心を大人にも発信

小中学生の防災講座に参加し、子どもの防災への関心が高いという発見があった。その防災への関心を大人に伝える場を提供したり、続けて子どもたちとの交流を続けながら一緒に新しい取り組みができたらと考えている。

メンバー
 (地域経営) 3年 大石竜弘、増田実奈、2年 中垣乃彩
 1年 池田康太、高野美羽音、山田海斗
 (地域共生) 2年 竹下智也
 (アート&マネジメント) 2年 石田百香
 (スポーツプロモーション) 3年 内藤由里子、1年 北嶋兼智
 指導教員：○教授 阿部耕也、准教授 牛場智
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 NPO法人ローカルデザインネットワーク

地域概要

東伊豆町・稲取は伊豆半島南東部に位置する港町であり、金目鯛などの食や、景色、温泉などを活用した観光を産業の主軸としている地域である。

町には伊豆急行線の伊豆稲取駅があり、東京などからのアクセスもよく、多くの観光客が訪れる。また、稲取は雛のつるし飾り発祥の地としても有名であり、毎年1月20日から3月31日にかけて「雛のつるし飾りまつり」を開催しているため、この時期になると多くの見物客が訪れる。

受け入れ先であるNPO法人ローカルデザインネットワーク(LDN)は、東伊豆町を拠点に、関係人口を増やすためのイベントの企画運営、空き家の利活用事業、マネジメント業等、「都市とローカルを繋ぐ」をモットーに活動を行っている。



▲稲取の風景 (写真1)



◀雛のつるし飾り (写真2)

これまでの活動

2019年度まではUCHIRA（稲取が好きな人の総称）を増やし、人が行き交う稲取を実現させることを目標に活動してきた。2020年度は、UCHIRAの力だけではなく、UCHIWA（地域で生活や活動をしている人）を巻き込んだ活動を行ってきた。

ロゲイニング風RPG「INATORI QUEST」(2019)

観光客に稲取の町を歩いてもらい、稲取の魅力をもっと知ってもらうためのイベント。



▲INATORI QUESTの様子 (写真3)

雛フェスブース出店/ライブペイント実施

ライブペイント、フォトフレームづくりワークショップ。

東伊豆通信 インタビューのお手伝い (2020)

東伊豆町の公式ウェブメディアに掲載される、東伊豆町の人に焦点を当てたインタビュー記事の作成を行った。



▲東伊豆通信 インタビューの様子 (写真4)

東伊豆未来会議 参加

東伊豆町で新たにプロジェクトを始めようとしている団体からの発表を受け、フィールドワークメンバーがそれぞれ興味のあるプロジェクトのオーナーとのグループディスカッションに加わり、来年度の活動の方向性を考えた。

東伊豆学生サミット (各年)

各テーマごとグループワークを行い、意見交換を実施。



▲東伊豆学生サミットの様子 (写真5)

ダイロク通信 (各月)

東伊豆町の回覧板で全戸配布されているダイロク通信に、静岡大学東伊豆フィールドワーク1年生の自己紹介記事や活動内容を紹介する記事を執筆した。

2021年度の活動について

4月

キンメナーレ・いなとりパズル

「キンメナーレ」という稲取を拠点に活動するプレイヤーさんと東伊豆で暮らす人々をつなげる街歩きイベントを開催。地域で活動する団体や有志の方々もイベントに出店して下さったため、初回であるにも関わらず、イベント自体のハードルが上がることもなく、多くの参加者で賑わった。
 また、イベントの回遊性と交流のきっかけを創出する目的で行われた、ミッション遂行型宝探し「いなとりパズル」も、地域の子供たちを中心に多くの方に参加して頂き、好評を得た。

11月



(写真6)



(写真7)



(写真10)

1月

稲取高校交流イベント

実際に稲取高校の生徒を静岡大学にお呼びして開催される予定だったが、コロナウイルスの影響でオンラインでの開催となった。静大の先生の講義を体験したり、私たち東伊豆フィールドワークの紹介やフィールドワークメンバーとの交流会を行ったりした。2022年度は、6月に静大で再び開催される。今後は東伊豆現地での活動も一緒にやっていきたいと考えている。

2月

3月

東伊豆学生サミット

東伊豆をフィールドとして活動をしている他大学の学生や高校生らと、意見交換や情報共有、活動紹介などを行った。

これから取り組むべきこと

昨年度の反省として、私たちは「フィールドワークは地域のための活動である」という固定概念に縛られ、自分たち自身が活動を楽しめなかったことが挙げられる。東伊豆学生サミットでは他大学の活動報告から、地域課題の解決以前に、チームメンバーの興味関心と東伊豆の特性を掛け合わせた活動であることと、その活動自体を「楽しむ」ことの必要性を学んだ。

その反省のもと、今年度は自分たちの気持ちを大切に、東伊豆フィールドワークとしての活動の軸を明確にし、一貫性をもった活動をしていきたいと思う。私たちは「一人一人のやりたいことの共通項を稲取で実現し、活力を届ける」ことを今年度の目標とし、「挑戦を楽しむこと」「自分なりの目標と達成意識を持つこと」「配慮と協力の姿勢を持つこと」「最後まで誠実に、全力で取り組むこと」を活動の軸とする。

具体的な活動内容としては、昨年度交流した稲取高校の学生や地域の子供たちとの密なコミュニケーションが叶えられるものを企画していきたいと考えている。

伊豆半島ジオパーク 保全と防災

伊豆半島ジオパークにおける環境保全と防災対策

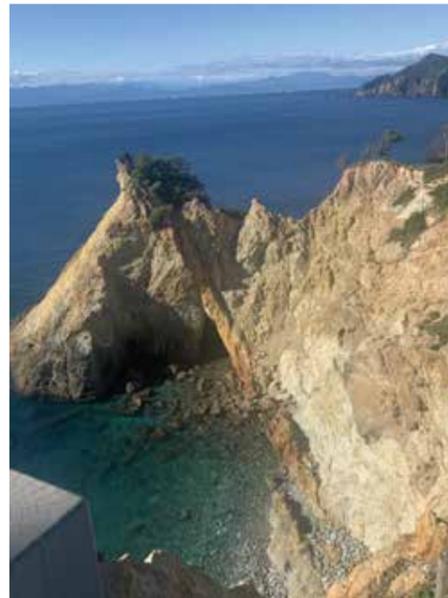
メンバー
(地域共生) 3年 西原悠人
(地域環境・防災) 2年 片川拓巳、木村瑠羽、1年 吉田智美
指導教員：○教授 小山真人、准教授 山本隆太
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
伊豆半島ジオパーク推進協議会
伊豆半島ジオガイド協会
西伊豆町災害ボランティアコーディネーター連絡会
浜松市学校生活協同組合
静岡県立浜松工業高等学校

地域概要

伊豆半島は、かつてフィリピン海プレート上に生じた海底火山群がプレート運動によって本州に衝突・陸化して現在の形となり、現在もなお活発な地殻変動や地震・火山活動が続いている地域である(図1)。そうした特異な成り立ちを反映した多数の地質学的資産と、それらが育んだ独自の生態系や歴史・文化遺産、ならびにそれらを保全し後世に伝える人々の活動が認められた結果、2018年にユネスコ世界ジオパークに認定された。

「見慣れた地形・風景には、すべて意味がある」—伊豆半島ジオパークは、伊豆半島の特徴的な自然とそこに育まれた地域社会のつながりを可視化する場である。ジオパークとは、地域の自然遺産を通して大地(ジオ)、生態系(エコ)、歴史・文化(ヒト)の3つのつながりをより深く理解し、それらを観光や教育などに活かすことによって地域社会の持続的発展を促すプログラムである。また、過去たびたび自然災害の被災地となってきた地域においては、防災教育への貢献もジオパークの重要な課題のひとつである。静岡県内では、伊豆半島ジオパークのほかに、浜松・浜名湖地域においてジオパーク構想が胎動を始めている。



(図1) 火山活動がつくった西伊豆町黄金岬の景観

これまでの活動

本フィールドでは、伊豆半島ジオパーク推進協議会や関連組織と連携しながら、伊豆市内の森林環境モニタリング手法の開発(2016~18年度)、西伊豆町の津波防災に関する知識・意識の普及啓発(2018年度~)、浜松市と湖西市における浜松・浜名湖ジオパーク構想に基づくジオツアーの開発(2020年度~)を進めてきた。

西伊豆町では、主に「防災まち歩き」というイベントを企画・実施してきた。防災まち歩きでは、防災科学技術研究所が提供する「eコミマップ」というWeb上の地図共有サイトを用い、参加者みずから屋外を散策しながら気づいた危険箇所等の情報をスマホやタブレットから入力し、地域の防災情報を共有・更新していく。2020年度は新型コロナウイルスの影響で住民を集めた活動は出来なかったが、2019年には静岡県立松崎高等学校の生徒や西伊豆町の地域住民を対象として、同町の仁科地区および田子地区内の津波危険区域における防災まち歩きを実施した後、ふりかえりと意見交換を行った。

また、浜松市と湖西市では「オンラインジオツアー」を開発・実践した。ジオパークをテーマとしたツアーを「ジオツアー」と呼び、市民や観光客が大地に端を発する地域の魅力を再発見・普及する目的で実施される。当初は対面バスツアーを計画したが、2020年度にコロナウイルス問題が生じたため、案内者が現地からネットを通じて在宅の参加者に中継するオンライン方式の謎解きツアーを開発した。ツアーのテーマは浜名湖や天竜川の大地の成り立ちと自然災害、ならびにそうした大地の営みによって育まれた地域の歴史・文化・産業などであり、両市内の小学校児童とその保護者を対象として2度実施した。

2021年度の活動について

2021年度は、西伊豆町仁科地区において小学生とその保護者を対象とした防災まち歩きを対面形式で実施することができた。西伊豆町は津波災害だけでなく、地震災害、洪水・土砂災害など様々な自然災害のリスクを抱えた地域であり、地域住民の防災意識向上が必要である。2020年度までの私達の活動は主に高齢者と高校生が対象であったため、対象世代の拡大のために小学生とその保護者を対象とした防災まち歩きを実施した(図2、3)。とくに小学生に対しては、楽しみながら地域の危険性を知ってもらうための防災クイズを最初に出題し、地域の危険性の理解を深めてもらった上で、実際にまち歩きを行った。その際には、津波危険区域に限定することなく、より広い範囲をカバーしながら土砂災害や洪水災害のリスクにも気づかせるルートを選んだ。

浜松市・湖西市においては、2020年度に引き続いて浜名湖と天竜川をテーマとしたオンラインジオツアーを、それぞれ2度ずつ計4度実施した。前年度と同じ小学生とその保護者を対象としたツアーに加えて、一般市民を対象とした大人向けのツアーも導入し、地域への愛着や観光意欲を深められるかという視点で、それらの効果を測定した。

また、2021年度は地域の環境モニタリングの一環として、新たに河川の水質調査にも取り組んだ(図4)。伊豆半島の北部を流れる一級河川・狩野川は、農業用水、水道水として利用されているほか、流域には豊かな自然環境に囲まれた観光地を擁する等、地域の産業・経済・文化の基盤となっている。しかし、上流部の水質常時監視地点で2003年からの数年間、基本指標のひとつであるBOD(生物化学的酸素要求量)が環境基準未達成であったことが静岡県環境衛生科学研究所から報告されている。そのため汚染源を考察する必要があると考え、狩野川の水質調査を行った。具体的には、狩野川の上流部から下流部までの水と支流の一部を採水し、溶存している一部のイオン(亜硝酸、硝酸、カルシウム、マグネシウム)濃度を測定し、周辺の土地利用や地質と比較することによって、川の流れに沿ったイオン濃度の変化やその原因を考察した。

これから取り組むべきこと

今後も西伊豆町の協力を得ながら、引き続きeコミマップを使用した防災まち歩き等の活動を継続し、地域住民の防災意識向上を目指したい。その際には、対象学年を絞りながら児童の発達段階に応じた手法を考えること、気づいてほしいことや到達レベルを事前に設定すること、災害リスクを単に怖いと思わずに向き合って生きる意識をもたせること、参加者自身が日々の生活の中でeコミマップを自主的・積極的に活用できるようにすることなどがポイントと考える。

水質調査については、今後も狩野川本流と支流を調べ、支流からの影響などの本流におけるイオン濃度変化の原因を探っていく予定である。また、現在測定しているイオン以外にも、濃度変化の原因を考察する上で有益となる物質が複数存在するため、調査項目を増やして更なる原因追及に努めたい。



(図2) 防災まち歩き実施の様子



(図3) eコミマップで防災情報を共有



(図4) 狩野川での採水の様子

伊豆半島ジオパーク 教育

伊豆半島ジオパークの持続可能な開発と教育（SDGs/ESD）の推進

メンバー
 (地域経営) 3年 北嶋泰成、2年 中橋幸作、勝浦寿、1年 綿引駿
 (地域環境・防災) 2年 青木奏磨
 (アート&マネジメント) 2年 一瀬日南子、辻真衣子
 (スポーツプロモーション) 3年 永井結登、1年 内山進都、長沼善虎
 指導教員：○准教授 山本隆太、教授 小山真人
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 伊豆半島ジオパーク推進協議会
 伊豆半島ジオガイド協会
 静岡県賀茂地域局
 株式会社伊豆バス



概要

クアオルトとはドイツ語で「クアKur」（治療・療法）と「オルトOrt」（場所）という言葉が合わさったもので「療養地」という意味である。土壌や気候、海などの自然条件と独自の治療法を組み合わせる健康増進に努める活動がドイツで先進的に行われている。日本ではドイツのクアオルトに倣い、ウォーキングの合間に脈拍を図り、霧吹きによって体温を調整するというスタイルのクアオルトが各地で開催されている。伊豆半島ジオパークでは、その豊かな自然と風光明媚な景観を活かし、松崎町雲見地区でクアオルトのテスト開催を行った。

活動意義

年齢や体力に自信がないなどの理由で運動を避けている人が多い。そんな人にクアオルトでのウォーキングを通じて「運動＝頑張るもの」ではなく、「運動＝楽しいもの」という考えを持ってもらう。また、雲見温泉や烏帽子山、思いで岬など雲見固有の地域資源をクアオルトと結び付け、ヘルスツーリズムとしてジオパークの新しい観光スタイルを提案することを目標とした。さらに、それらを通じて、地域住民の健康寿命を延ばすことや、地域の魅力を再発見してもらうことを目指した。

内容と成果

10月17日、松崎町雲見にて、ジオパークをめぐるジオツアーに健康ウォークの手法（クアオルト）を掛け合わせた「ジオクアオルトツアー」のテストツアーを実施した。町内外から12名の参加者が集まり、雲見の美しい自然と文化に触れながら、ウォーキングと温泉入浴を掛け合わせた形で開催した。実施後のアンケートでは「地域の資源を生かして楽しく歩けた」「他の地域でもやってほしい」などの反応を得られた。

なお、このツアーは未来社会デザイン機構が進める「2030松崎プロジェクト」の「エコ・ツーリズムとサステナブル・ツーリズムチーム」とも連携している。開催日同日の中間報告でも取り組みを発表した。これからは松崎町や伊豆半島の「健康と教養」に貢献したいと考えている。

これから取り組むべきこと

今後は対象地域を広げて、あらゆる分野からの活動を行っていきたく考えている。教育班それぞれのメンバーが独自のプログラムを企画し、具体的には、伊豆半島の地形や自然を活かした防災・環境教育や、豊富な温泉の中でも足湯を使った取り組み、漁業教育にSDGsと絡めた企画などを構想している。また、来年度はアート分野からの活動も企画している。地域×アートによる教育を実践することによって、新たな価値が創造されると期待している。

地域概要

静岡県東部に位置する伊豆半島は、漁業が盛んな伊東や下田、観光地として有名な修善寺や熱海などから成る。伊豆半島は15市町が協力して運営されており、2018年4月にはユネスコ世界ジオパークに認定された。ジオパークとは、地形や地質またそこに根付く文化や伝統を保護活用していく場であり、日本では現在、ユネスコ世界ジオパークに9か所が認定されている。

伊豆半島ジオパークは、現在でもプレート動きによって地殻変動をしており、様々な地形を構成している。

このような特殊な地形を活かした教育活動などを行うことにより、我々は伊豆半島ジオパークの地域振興を目指している。実際、私たちの教育班では、2015年の国連サミットで採択されたSDGsの「誰一人取り残さない」という基本理念に基づいて、あらゆる活動を行っている。

静岡県東部に位置する伊豆半島



これまでの活動

- 1**年目（2017年度）
 - ジオパークについての学習
 - ジオガイドとのワークショップ
 - パンフレット作り
- 2**年目（2018年度）
 - SDGs肉まんの開発
 - ジオパン開発、販売支援
 - 郷土料理についての学習
- 3**年目（2019年度）
 - 大学生を対象としたツアーの開設
 - VR動画を利用した教材の開発
 - 食育教材の作成
- 4**年目（2020年度）
 - 伊豆半島におけるサイクリングルートの開発
 - 西伊豆でのオンラインジオツアーの開設
 - 上級生から1年生へ向けたガイドツアーの実施

2021年度の活動について

5年目となる2021年度は、主にクアオルト（ドイツ語で療養地を意味する）を参考にしたウォーキングイベントを企画し、開催に向けたミーティングや現地の下見を行った上で、10月に実施することができた。

4月には、伊豆半島ジオパーク推進協議会と静岡県温泉協会の共催イベントを支援し、伊豆修験の歴史について学んだ。6月は西伊豆の深海魚を活かした地域おこしに取り組みむ青山沙織さんにインタビューし、「漁業とジオパーク」の可能性について考えた。11月には、7月の土石流災害で大きな被害を受けた熱海市伊豆山地区の被災状況を視察した。当月はそのほか学校教員研修の支援や、東海工業株式会社伊豆事業所様のご協力のもと西伊豆にある伊豆珪石鉱山の見学をした。また、3月に三島の小中高生を対象としたまちあるき教育イベントを企画した。しかし、蔓延防止等重点措置に基づき一般参加者は募集せず、学生同士でテストツアーを行った。

地域おこし協力隊の青山さんにインタビューを行う様子



ウォーキングイベント下見の様子

参加者募集ポスター



ウォーキングイベント開催当日の様子



学生ガイドによるジオの説明



多世代の居場所づくり

多世代の居場所づくりと防災教育の実践

メンバー
 (地域共生) 3年 中村文、1年 瀧川理越、吉田美空
 (地域環境・防災) 4年 遠藤爽、2年 山口望、渡邊大翔、1年 木村絢
 (スポーツプロモーション) 3年 仲原風歩
 指導教員：○准教授 山本崇記、准教授 須藤智、講師 立花由美子
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 龍津寺
 静岡市立清水小島小学校
 社会福祉法人静岡市社会福祉協議会

地域概要

「多世代の居場所づくり」(旧県営団地) フィールドでは、これまで静岡市清水区吉川団地で活動してきたが、コロナ禍を経て、同じ清水区にある小島地区で活動を始めた。小島地区は、東西を山に挟まれ、興津川が流れる自然豊かな地域である。一方で、超高齢化・少子化が顕著であり、「居場所づくり」が地域課題となっている。子ども寺子屋などの居場所づくりに取り組む龍津寺をベースに、寺子屋への参画や小島小学校での防災教育の取り組みを進めている。



龍津寺外観 (写真1)

これまでの活動 (2018~2020年度)

○県営団地での活動

- **でん伝体操 (定期)**
静岡市による高齢者向けの介護予防体操であるでん伝体操を団地の方々とともに行った。
- **非常食試食会 (2019年2月)**
災害に備えて、非常食の存在とともに、アレルギー問題やローリングストックについて知ってもらうための試食会を実施した。
- **子ども向けイベント (2019年10月・12月)**
住民からの要望を受け、子ども向けのイベントを2回実施し、吉川団地に住む子どもたちや保護者との交流を深めることができた。
- **きっかわびより (不定期)**
新しいメンバーの紹介や活動の様子を住民の方に伝えるために、広報紙「きっかわびより」を作成した。
- **地域アセスメント (2018年9月)**
地域内外の方々と話し合いながら、地域の特性や社会資源、地域ニーズなどを分析・共有し、地域の現状を把握した。
- **しずおか自治取り組み発表会 (2020年1月)**
静岡市内の自治会町内会の取り組みを発表する交流会に参加し、今後の取り組みのヒントを得ることができた。

○多世代の居場所づくり

- **座学 (2020年度前期)**
専門書の輪読によって、フィールドワーク活動の課題を見つけ、現地への関わり方や成果の公表の仕方について検討した。
- **インタビュー調査 (2020年12月18日)**
龍津寺・勝野秀敏住職にインタビューを行い(オンライン併用)、「課題解決」や「ニーズ」にこだわりすぎず、誰もが集える居場所を自然に作り出すことの重要性を理解した。
- **子ども寺子屋への参加 (2021年1月30日、2月6日、2月27日)**
3回の寺子屋への参加を通して、お寺がコミュニティの拠点として機能し、子どもや保護者にとって、重要な居場所となっていることを体感した。

2021年度の活動について

○龍津寺での継続的な活動

• **子ども寺子屋 (2021年6月26日、10月16日)**
今年度は寺子屋への参加を2回行った。寺子屋では、まず勉強に集中するため『論語』を音読し心を鎮めるところから始まる。そこから学生が先生役(見守り)となり勉強を教えつつ、子どもたちと談笑したり、勉強後には寺の周りを走り回ったりして、楽しんだ。子どもたちと接する中で、子どもたちが多様な大人(社会)と安心して出会える場として機能していることの重要性を理解した。

• 防災〇×クイズ (2021年6月26日)

子ども寺子屋の時間帯を活用し、学生の専門性を生かす場として、寺子屋の活動の中で防災〇×クイズを実施した。事前準備と発災時のときに必要な防災知識について、参加してくれた子どもたちが楽しみながら学べるように、〇×形式のクイズ大会を行った。学生たちが思っていた以上に子どもたちは考えながら回答していて、小島地区では小学生から防災意識を持つように教育がなされていると感じた。



防災クイズの様子 (写真2)

○小島小学校での活動

• 防災教室 (2021年12月9日)

小島小学校の6年生を対象に防災教室を行った。二部構成で行い、初めに座学で防災の基本知識を学んだ後、実際に地域を歩く防災まち歩きを行った。座学では小島地区で実際に起こる可能性がある災害をメインにどのように逃げるのか、避難するときに危ない箇所はどこかなどの内容でパワーポイントを作成し、授業を行った。その後の防災まち歩きでは、2つのグループに分かれて通学路を歩き、避難するときに危険な箇所がどこなのかを子どもたちに探してもらった。子どもたちが防災まち歩きで危険箇所を探すときに、座学で得た知識を生かすだけでなく、その内容をさらに深めることができていた。小島小学校・中学校の一貫教育の中で重視されている防災教育の内実化に一定程度寄与することができたのではないと思う。



防災教室(座学)の様子 (写真3)



防災教室(防災まち歩き)の様子 (写真4)

これから取り組むべきこと

- 龍津寺の取り組みに継続して関わらせて頂き、地域との信頼関係を強化する。また、コロナ禍でも開催できるような企画を学生側から提案する。
- 小島生涯学習交流館などで行われているイベントに積極的に参加し、小島地区全体のまちづくりへと参画する機会をつかむ。特に、防災や生涯スポーツ、地域共生に力点を置いていく。
- 小島地区の高齢者と寺子屋の子どもたちをつなぐイベントを学生主催で試みる。

学内地域連携拠点

静大発 地域と大学の連携を広めよう！

メンバー
 (地域経営) 3年 田崎碧、2年 太田そよ香、納吉成
 (地域共生) 2年 油井柊斗、1年 古瀬愛優美
 (アート&マネジメント) 3年 内柴麻衣、1年 馬場凜桜
 (スポーツプロモーション) 1年 金子涼太郎、近藤優介
 指導教員：○特任助教 川崎和也、准教授 山本崇記
 ※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
 静岡大学学務部地域連携推進課

地域概要

学内地域連携拠点フィールドは2018年度より活動を開始したフィールドである。私たちは現在、静岡大学地域創造学環（以下、学環と明記）を主な連携先として活動を展開している。

学内地域連携拠点フィールドでは「つなぐ」ということを活動テーマに掲げている。具体的には、①学環と地域を「つなぐ」、②学環のフィールドおよび学生同士を「つなぐ」ことである。こうした取り組みを通じて、より魅力的な地域社会の創造に取り組むことのできる人材の育成に寄与することを目指している。



活動の様子

これまでの活動

学内地域連携拠点フィールドは、2019年度までは静岡大学教育連携室（現在、地域連携推進課）と連携し、「静大発 “ふじのくに” 創生プラン」(文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」)の促進を目的として活動を行ってきた。とりわけ、私たち自身が「地域と大学の拠点になる」ことを意識して以下のような活動に取り組んだ。

(1) 地域創造学環ホームページの改定

学環の魅力を受験生により広く伝えるために、学環のホームページの内容を改定した。夏季オープンキャンパスに訪れた高校生たちを対象にアンケートやインタビューを実施したり、学環の教員らとの協議を重ねて、学環のホームページの改定に取り組んだ。

(2) オープンキャンパスでの展示企画の実施

学環の広報の一環としてオープンキャンパス(OC)で企画を行いたいとの意見から、夏季OCへの参加およびキャンパスフェスタ(秋季OC)での企画を実施した。企画の内容は、①学環のフィールドワークのポスター展示、②学環1年生への質問コーナー、③フィールドワークで活動する学生たちの写真とメッセージを記載したポスターの展示である。

(3) 全国の大学のホームページの調査

学環のフィールドワークの情報発信に取り組むにあたり、全国各地にある地域系の学部・学科を持つ20の大学のホームページ調査を行った。ホームページの見栄え、動画の有無、更新率などの11の項目について検証し、さらにそれらを学環のホームページと比較検討することで、学環のホームページの良い点、課題点、改善点を明らかにした。その後、これらの調査結果を学環のフィールドワーク委員会に報告し、学環のホームページのさらなる改定に向けた取り組みがなされることとなった。

(4) フィールドワークの取材、活動紹介記事の作成

学環のフィールドワーク活動の情報発信に取り組むにあたって、各フィールドの活動を紹介する記事を作成した。その第一弾として、2020年11月23日(日)、掛川市にある「田園空間博物館 南遠州とうもんの里総合案内所」を訪れて、とうもんの里フィールドの学生たちの活動の様子を取材した。その後、これらの取材した内容を整理し、取材記事を完成させて、冊子として刊行するとともに、学環のホームページでも公開した。



作成した取材記事

2021年度の活動について

前年度に引き続き、私たちは、①学環のフィールドワーク活動の情報発信、②学環のフィールド及び学生同士をつなぐ、ことを活動方針として定め、主に以下の2つの活動に取り組んだ。

(1) フィールドワーク活動の取材

学環のフィールドワーク活動を内外に発信するために、いくつかのフィールドを訪れて、その活動の様子を取材した。2021年度は、下記の2つのフィールドを訪問した。

《御前崎市フィールド》

2021年6月12日(土)、御前崎市フィールドを訪問し学生たちの活動の様子を取材した。当日は御前崎市役所の方々や地元の高校生たちなどにもインタビューを行った。

《多世代の居場所づくりフィールド》

2021年6月26日(土)、多世代の居場所づくりフィールドの新しい拠点である龍津寺を訪問し、学生たちの活動の様子を取材した。当日は住職の方やお寺にきた子どもたち、保護者の方々にインタビューを行った。

(2) 「フィールドワーク交流会」の企画

学環の学生たちが集い、テーマに沿って意見交換を行う「フィールドワーク交流会」を企画し、その実施に向けた準備に取り組んだ。交流会の目的は、①それぞれのフィールドが持つ悩みや課題を共有し、その解決策を議論して発見すること、②他フィールドとの交流を通じて自フィールドの新たな活動につなげること、③学環生同士の交流を深め、フィールド間での連携を生むことで、学環全体としてのフィールドワークの質の向上に努めることである。

2021年度は「フィールドワークにおける情報発信」というテーマを掲げて、交流会を開催することにした。交流会を企画するにあたっては、各フィールドにおける情報発信の現状と課題を把握するために、アンケートを作成し、その回答への協力依頼を行った。なおアンケートについては、16あるフィールドのうち、12フィールドから回答を得ることができた。私たちは、毎週学内に集まってアンケートの分析を行い、各フィールドにおける情報発信の現状や課題点などについて明らかにした。さらに交流会の実施に向けて、ポスターを作成したり、当日のプログラムや運営の方法を検討したり、会場となる教室の手配や物品などの手配を行った。

残念ながら、新型コロナウイルスの感染拡大により、2021年度の交流会の開催を見送ることとなったが、交流会の準備への取り組みを通して、自分たちのアイデアをかたちにし、それを実現してゆくためのノウハウについて実践的に学ぶことができた。



取材の様子



交流会のポスター

これから取り組むべきこと

これまでの活動を踏まえ学内地域連携拠点フィールドが今後取り組むべきことは、次の2点である。

(1) 「フィールドワーク交流会」の開催

新型コロナウイルスの感染拡大により、2021年度に開催できなかった交流会を開催する。交流会の実施に向けた準備・ノウハウがすでに整いつつあるので、新型コロナウイルスの感染状況を顧みながら、安心安全な交流会の実現を試みる。

(2) フィールドワーク活動の取材の継続

取材のためのマニュアルを作成し、学生間で共有するなどして、取材のための体制づくりに取り組んだ。新型コロナウイルスの感染状況を顧みながら、引き続き、学環のフィールドワークの取材を実施する。

以上の活動を通して、私たちは、学環と地域、そして学環のフィールドおよび学生同士を「つなぐ」ための結節点としての役割を果たしてゆきたいと考えている。

2021年度に2年半の活動を終えた学生たちの 声を紹介します！

～地域とのかかわりや実践を通じて得た学び、自らが成長できたこと～

「地域創造学環フィールドワーク」では、学生は1年次後期から2年半、原則同じフィールドに継続的に関わり活動をし、2021年度に2年半の活動を終えた学生たちからの声を集めました。

私は2年半で主に2つのことを学びました。1つは地域との関わりやすさ、面白さについてです。地域との関わりと言うと、地域創生、地域活性化が思い浮かびますが、フィールドワークを通して、地域との関わりとは、人と繋がり、協力し、関わることでありと気付きました。また、その関わりの中でイベントの企画や地域の課題を考えることの難しさを実感しました。

もう1つは仲間と協力して課題を解決することです。1年時は受動的な学びがほとんどでした。しかし、学年が上がるにつれて自分が中心となり、課題を解決していきました。3年時には地域にイベントの提案をし、地域の方と協力することで、学生だけでは感じる事の出来ない協力的な学びを深めることが出来ました。

最後に、私達3年生が成長をすることが出来たのは、木村先生をはじめとした先生方、フィールドワークオフィスの方々、清水港の方々の協力があった事です。本当にありがとうございました。

清水港フィールド 大川原 翔



私たちのフィールドでは、おまちバル実行委員の方々や実際にイベントを運営していく中で、「おまち」を盛り上げるためにはどうすればいいかを考え続けてきました。

最初に、若者のおまちでの飲食店利用頻度の低下や、飲み歩き文化の衰退などを課題として設定し、課題解決に向けて様々な活動を行ってきました。社会人の方々や活動を共にする中で、自分たちの力不足な部分を強く実感する場面も多く、思考錯誤しながら作業を進めていきました。そのため、実践に近い環境で自分のスキルを応用していく力が身につく、スキルアップにつなげることが出来たと実感しています。加えて、地域の方とより密着した活動をする事ができたので、コミュニケーションの部分でもとても大きな学びになりました。

コロナの影響で断念してしまったコンセプトパルの運用など、これからのおまちフィールドではより地域のブランディングという観点から学びを深めていってほしいと思います。

おまちフィールド 渡邊 紗也佳



自分はフィールドワーク活動を通じて何事も失敗しても良いから行動していくことが大事であることを学びました。自分達はスポーツイベントを中心に活動していくことを決めて活動していましたが、新型コロナウイルスの影響もあり、イベントを開催できずにいました。新型コロナウイルスの影響が少し落ち着き、イベントを開催すると参加者は数人という結果に終わりました。しかし、そこから学び、どうすれば参加者が増えるのか、さらに改善できる部分はないだろうか考えるようになり、何事も一度行動してみる必要があると思いました。また、コロナ禍でのスポーツイベントの開催などスポーツプロモーションコースの学生が多い、庵原フィールドのメンバーにとってはとても良い勉強が出来たと思っています。このように行動に移すと失敗もありますが、プラスになることが多いということをフィールドワークを通じて学びました。

庵原フィールド 山口 理生



地域との関わりや実践を通じて得た学びとしては、自分たち学生がやりたいことと地域が行ってほしい事には違いがあるということである。いくら「アイデアがあればなんでもしてくれ」といっていても、本当はやってほしい事がある。そのやってほしい事を学生側がどう引き出せるかが地域との関わりに必要なのではないかと考える。そして成長できたことは、その本当にやってほしい事を引き出すことが出来るようになったことだ。新型コロナウイルスの影響で「長政祭り」が中止になり、学生も地域の方々も残念な気持ちであった。それを考慮したうえで、私たちは足元灯の飾りのテーマに「長政祭り」を上げた。この長政祭りの飾りは商店街の方々にこれをみて来年こそはという気持ちになれると、とても好評だった。こういった地域の人々のやってほしい事を引き出し、実行することが出来るという点が成長したのではないかと考える。

浅間通り商店街フィールド 山梨 純怜

2年半のフィールドワークを通じて、様々な世代や地域、考え方の人と議論・活動を行いました。どの活動も新鮮で多くを学ぶことができたが、中でも印象的だったのは「わかもののみちサミット2020」です。この活動には若者によるまちづくり活動を活性化することを目的とした人が全国から集まり、彼らと議論しました。皆多種多様な活動に取り組んでおり、最終的な目標は同じであっても様々な角度から取り組む方法が存在する事を実感し、それを意識することで後に地域課題解決の方法を考える際に、様々な人の立場から物事を考えることが出来ました。

私はこのような活動を通じて、多角的な視点から物事を考えることができるようになりました。今後フィールドワークを通じて得られた知識や能力を地域に還元し、地域の活性化に貢献していきたいと思っています。

焼津市浜通りフィールド 佐々木 啓人



佐久間では、人とつながることの温かさや重要性を学ぶことができた。佐久間は中山間地域で過疎化だけでなく高齢化も進んでいる。その中で、学生が地域に足を踏み入れても、対応して下さる方々は「よく来たね」「待ってたよ」と声をかけてくれ、佐久間の町を歩いていると、挨拶はもちろん「学生さん？」と地域の方が声をかけてくださる事が多々ある。また、佐久間のイベントに参加をすると、「〇〇をやっているんだけど、今度やってみる？」と提案をいただくこともあった。このように、学生を温かく迎え入れるだけでなく、交流を通して新たなつながりを作ることができた。そのために、自分から積極的にお話を聞いたり佐久間の魅力を伝えるためには何が出来るかを考えたりした。そして、自分だけではなく同じフィールドのメンバーと協力することで自分達の目標を達成することができた。

佐久間フィールド 伊藤 響



2年半の活動を通して、まず自らが文芸に対して興味を持つようになり、文字を用いた表現の面白さを学んだ。また、グループワークで1つのモノやコトを企画していく際に、やるべきこと、やりたいこと、できることのバランスをよく考えて計画することの重要性を学ぶことができた。

他にも、一緒に活動するメンバーや、受け手のことを考え、思いやりを持って行動しようという意識がより強まった。こうした意識は、グループでの連携を円滑にすることや、企画を考える際に客観性を持って取り組むことの助けとなる。また、このような活動の場だけでなく、日常生活においても必要なものであり、人としても成長できた2年半であった。

浜松文芸館フィールド 半田 颯太



とうもんの里フィールドでは、子どもを呼び込む環境づくりを目標とし、子どもがどうしたらとうもんの里に来てくれるか、楽しんでくれるか、ということも、2年半、考えてきました。とうもんの里には美しい田園風景が広がっており、私自身も、農業や、それに伴う自然の大切さを学びました。また、フィールドの仲間との話し合いや発表活動、地域の方との関わりの中で、人と人とのコミュニケーションが持つ大きな力を感じ、それらが地域に及ぼす明るさや居心地のよさを知ることが出来ました。絵を描かずにいられなかった美しい風景を守っていくためにどうすべきか、自分の頭で考えて、調査し、意見を話すための力がフィールドワークを履修する以前より付いたように思います。学んだことを生かして、今後、さらに、世界を形作る身近な地域を守ることに繋がるような、人の心に訴えかける作品を、アートの面から作っていきたくと思っています。

とうもんの里フィールド 芳村 日苗



私たち御前崎市フィールドでは、地域の強みを生かし自分たちでイベントを企画・実行していくという貴重な経験をさせていただきました。主な活動は、フライングディスクを資源として活用することを通じて、魅力あふれる元気な御前崎市を実現することを目指す取り組みです。御前崎市の環境を活用し、フライングディスクを根付かせるべく体験会を企画・実行しました。この体験会を行うにあたっての計画や準備の段階にも多くの苦労があり、その分たくさん学びを得ることができ成長することができました。地域に入って行う学環のフィールドワークならではの地域の人とたくさん関わることができる機会に大変感謝しています。また、このような状況の中私たちの活動に協力してくださった御前崎市の皆様、本当にありがとうございました。

御前崎市フィールド 間下 桃子

フィールドワークを通して、失敗を恐れず挑戦することの大切さを学びました。考えていたイベントや企画が新型コロナウイルスの影響で実施できなくなることが何度もあり、活動が行き詰まることもありましたが、しかし、成果を形に残したいという気持ちと、松崎町住民の方の後押しにより、商店街パンフレットの作成に踏み切ることができました。一つのことを学生と地域の方で協力して完成させることで、互いに信頼関係を築くことができた実感しています。また、自分たちの力で作り上げたという自信も付き、挑戦してみても良かったと心から感じました。これから先も困難に直面することがあると思いますが、松崎町での活動で身につけた何事にも挑戦する姿勢をいかし、乗り越えていきます。私たちの活動に協力し、温かく見守ってくださった松崎町の皆様、本当にありがとうございました。

松崎町 商店街フィールド 金瀧 芽生



地域との関わりや実践を通じて、「多様な人々とコミュニケーションを取ることに難しさ」「地域に住む人のことを第一に考える」ことを学びました。

「多様な人々とコミュニケーションを取ることに難しさ」では、おそらくフィールドワークのような地域に出る活動をしなければ、こんなにも多種多様な年代の方とお話をする機会はなかったでしょうし、このような機会を通じて自分のコミュニケーション能力向上につなげることができました。それはフィールドワークでも、他の活動にも活かすことができている。

「地域に住む人のことを第一に考える」は、大学内でも言われてきたことではありましたが、実際に活動してみると、松崎町の主役は松崎町民とそこに訪れる観光客です。私たちが活動する上で、「お邪魔させていただいている」という感覚を忘れてはいけないし、その中で松崎町と一緒に大学生ができることを考えなければならないのだと痛感しました。

松崎町 観光と防災フィールド 那須野 智大



私は東伊豆町が大好きである。街の景色や、温かい地域の人々、空気など街全体が素敵である。このように思える人が増えれば良いなと思い約2年半活動してきた。この魅力的な地域に対して外部の大学生団体がどのようなアプローチをかけて、地域を盛り上げていくかを模索する中で様々なことを学び体験させていただいた。フィールドワークから私は「つながり」を持つことがとても大切なことだと学んだ。地域と外部のつながり、地域内でのつながり、人と人とのつながりがフィールドワーク及び地域活性において大事な要素である。人が変われば地域が変わる。約2年半の短い間だったが、私たちがした活動が地域の人にいい影響を与え、少しでも地域がプラスに変化していたら嬉しいと思う。

東伊豆町フィールド 内藤 由里子



私は伊豆半島ジオパークフィールドで「防災」という観点から活動を進めてきた。活動を行う中で私は、地域の防災意識が低下しているという課題を発見することが出来た。その課題に対して、「防災まち歩き」というイベントを行い、地域の方々と一緒に取り組むことで課題の解決を図ることが出来た。その際に学んだことは、当事者の視点になって物事を考える力だ。活動では、アイデアベースで浮かんだ企画をそのまま実行しようとした時があった。しかし、その企画は地域に本当に求められているのか、地域のためになるのかということも適切に考えなければ、地域関係者と自分たちとの間にギャップが生まれてしまうことに気づいた。なので、活動を行う際には、当事者（地域）の視点に立ち様々な企画を考えていく必要があることを学ぶことが出来た。また、活動を通じて、企画を考える想像力を高めつつ企画を実行するまでの全過程に関わったことは、自分にとって大きな経験となったと感じた。

ジオパーク 保全と防災フィールド 西原 悠人



2年半のフィールドワーク活動を通して、事前準備の重要性を学んだ。フィールドワークでは主に、地域住民の方々を対象とした講演会や企画の運営を行った。現地に行く回数に限られているため、事前に活動目的を明確にし、綿密な計画を立てることにこだわった。また、この2年はコロナウイルス感染拡大の影響などで、例年に比べ現地に行けないことが多かったため、積極的にzoomを用いた。実際に会えない分、こちらの思いが伝わりにくいと考える、事前のアジェンダ確認や、アイスブレイクの用意を入念に行った。また、相手に伝わりやすい資料作成にも注力した。

このような活動を通して、1つのプロジェクトを立ち上げから開催までやり切れたことが自信につながった。今後も事前準備を怠らず、大きな目標を達成していきたい。

ジオパーク 教育フィールド 永井 結登



私の所属したフィールドワークは、多様な世代や背景の方が集まれる「居場所づくり」がテーマでした。コロナ禍となり、従来お世話になっていた県営団地フィールドと上手く関係性を保つことが出来ず、フィールドワークにおける「よそ者」である私たちの立場の難しさに直面しました。居場所づくりには住民との信頼関係の構築、話を聞く場所の構築が必要である。コロナ禍で県営団地の住民の方々との関係を継続することが出来なかったことが大きな学びであり、心残りの部分でもありました。そのことを通じて、フィールド先には学びの場を提供していただいていることを痛感することが出来ました。「よそ者」である自覚を持ち、フィールドワークに臨む力を身に付けられました。2021年度の冬から、清水・小島にある龍津寺を中心に活動を行い、住職や地元小学校の先生方にご協力をいただきながら、「居場所」をつくること、そしてその場所を継続する活動を行うことができました。居場所を創り出す力は社会に出てからも活かしていきたいと思っています。

多世代の居場所づくりフィールド 仲原 凪歩



2年半を通じて、自らが属する場所に関して課題意識を持ち、主体的に行動する意識が身についたと思います。私が所属する学内地域連携拠点とは他のフィールドと違い、地域の方と直接関わる機会は少なく、地域創造学環生からの認知度も低かった為、最初はやりたいことが多くても漠然としてしまっていました。しかし、先輩方の広報活動や取材記事の作成の成果もあり、地域創造学環の繋がりが強化に絞って活動を進められました。コロナ禍によって1月に対面予定していた交流会は開催を延期することになってしまいましたが、今後のフィールドワーク同士の連携による活動の向上を見込めるものになっているので、先輩達の今後の活動に期待しています。

学内地域連携拠点フィールド 内柴 麻衣

地域創造学環のフィールドワークにご協力いただいている 地域のみなさんの声をご紹介します！

※表記のご所属、お役職名等は2021年度のもの

清水港フィールド

地域の人たちに共感されるフィールドワークへ

学生の考えた年度目標の達成ため、現調から提案までのプロセスデザインのフィールドワークを伴走している。

コロナ禍により地域の人とのつながりが薄れ、今年度は目標とする提案実践までができなかったが、学生の素案をもとに地域の人との意見交換に切り替え実施することができた。

また、意見交換後の地域住民評価と学生評価から、地域住民と学生とのギャップの確認や、地域の人たちの共感を得られれば、実現も可能であることや、地域から期待されていることを感じる成果もあった。

有限会社都市環境デザイン研究所 代表取締役 木村 精治 様



庵原フィールド

2021年度庵原フィールドワークは、これまでのアンケート調査などの積み重ねを基に、地域資源を活かした、健康とまちづくり企画を進めていました。しかし引き続きのコロナ禍で思うようなフィールドワークが出来ず、むしろその企画よりも今後の進捗と判断に時間を取られる事が多くなったと思います。学生は自治会、JA、私の勤務するJ-STEPなどと調整を取り、相当悩んでいました。その意味では、学生の「人間力」は確実に養われていたと思います。コロナ禍における苦労があり、より力が付いたと思います。頑張ってください。

公益財団法人静岡市まちづくり公社
健康スポーツ課 課長 酒井 政幸 様



おまちフィールド

本年もリモートでの協議・共同が中心となりましたが、コロナが落ち着いた2021年秋には、前年より一歩踏み込んだ活動を試みました。「クラフトビール王国静岡」のPRに向けた新企画「第1回静岡クラフトビアバル」では、早朝でのビール配り、街頭ポスター貼付、市内3ヶ所のブルワリー取材&記事編集を実施。どれも初めての体験に、昨年以上に「社会とのつながり」を実感できたのではと思います。次年度では、いよいよ「学生発想でのバリエーション企画」にチャレンジしたいと思います。イベント作りを通じて、「みんなで創り上げることの泣き笑い」をぜひ体験してほしいです。

静岡おまちバル実行委員会 実行委員長 松下 和弘 様



浅間通り商店街フィールド

商店街日常の歯車が狂ったコロナ禍の中で、将来に向けたPRや継続してきたイベントをどうするのかという新しい問題にとまどう日々を送ってきました。

そういう中での学環生の活動は、PR動画や足元灯装飾の制作でした。WEBを活用した発信もしなくては、2年も開催できなかった長政まつりを忘れないで欲しいし、という私たちの気持ちを汲んでくれたことを嬉しく思い、限られた状況で頑張った学生さんたちに感謝しています。

静岡浅間通り商店街振興組合 理事 原木 公子 様



焼津市観光協会

焼津市浜通りフィールド

浜通り服部家がゲストハウス「帆や」として生まれ変わり、令和3年4月から運営が始まりました。これは太田先生を始め、学生の皆さんが、「浜通り活性化計画」及び「服部家保存活用計画」の策定やあかり展など、様々な形で浜通りの活性化に向けてご協力していただいたおかげです。若者がまちづくりに参画してくれると地域の人が喜び、活性化します。

どうかこれからも浜通り地区そして焼津市の活性化を応援してください。お願いします。

焼津市政策企画課 課長 山下 敦史 様



浜松文芸館フィールド

夏の「楽しいお話づくり講座」では、小学生と絵本を題材としたお話づくりにチャレンジし、秋には浜松城周辺を散策し、ワークショップ「吟行DEススメ!」で俳句づくりをしました。参加した子どもたちにとって良い思い出となりました。「俳人くん」と「ことばちゃん」は浜松文芸館のお友達として『浜松市民文芸』に登場しました。俳句ガチャの景品のクリアファイルは大人の方にも喜ばれています。今年もコロナ禍で活動が制限されましたが、子どもたちに夢を与え、若い人たちに文芸館を知ってもらおうと大学生ならではの視線とアイデアで企画をいっぱい打ち出し、実践してくれてありがとうございました。これからもよろしくお願いします。期待しています。

公益財団法人浜松市文化振興財団 浜松文芸館 館長 鈴木 隆之 様



佐久間フィールド

佐久間ダムや滝、川などおすすめスポットへ行ったり、五平餅や蕎麦、佐久間に長くある食事処で食事しながら交流したり、ごまちゃん作りや私自身が取り組んでいる秘密基地作りやゴミ拾いイベントに取り組んだり短い期間でしたがとても濃い時間を過ごしてきたと感じています。特に印象に残っているのはゴミ拾いの時に参加していた地域の学生や出身者に沢山の質問をして交流を深めていた事です。ゴミ拾いの時だけでなく地域の人たちに積極的にコミュニケーションをとって学ぼうとする姿勢がとても素敵でした。

浜松山里いきいき応援隊 山田 恵美莉 様



とうもんの里フィールド

とうもんの里も少しづつ大学生に慣れてきた感じがします。学生さんのほうは、もっと知りたい近づきたいと思っているのです。そこを埋めるものは何でしょうね。今年も、自己探求の時間がありました。知りたいがあふれ出しました。その調子!おのずから求めることって、とても大事です。お互いが近づきましょう。学びあう関係でありたいと願っています。

NPO法人とうもんの会 理事長 名倉 光子 様



御前崎市フィールド

2018年から始まった御前崎フィールドワークですが、長引くコロナ禍で学生たちも大変苦労されたことと思います。そのような中、御前崎市を「フライングディスクの聖地」にしよう頑張ってくれた学生と御協力いただいた関係者の皆さまに感謝申し上げます。

6月の体験会では、趣旨に賛同してくれたフライングディスク元日本代表の中野源一さんの参加もあり、当日は参加者全員がフライングディスクの楽しさや可能性を実感できました。このことは、企画運営に携わった学生たちにとっても大きな自信と励みになったことでしょう。これからも賑わいの創出と魅力あふれるまちづくりを目指し、産・学・官・民が連携して取り組んでいきたいと思います。

御前崎市企画政策課 課長 清水 正明 様



松崎町フィールド

新型コロナウイルス感染症の影響を受けつつも、隙を見て、何度か松崎町に来ていただくことができました。「観光と防災」チームは中学生とのグループワーク、「商店街の振興」チームは商工会とマップづくりと、これまで以上に地域との交流が持てたのではないかと思います。

大学のない当町にとって、このフィールドワークは新しい活力を与えてくれる大事な存在です。今後、更なる交流を図り、地域を動かす存在になっていただくことを期待します。

松崎町企画観光課 係長 齋藤 一憲 様



東伊豆町フィールド

コロナ禍でのフィールドワークでしたが、この状況にめげることなく自分たちなりの活動と一緒に展開することができました。

今年度の苦境をとともに乗り越えた思い出は、きっとフィールドワークメンバーにとっても地域にとっても有意義な経験となったと思います。

先代からつないできた東伊豆での活動を、これからもさらに発展させ、先の代へつないでいけること楽しみにしております。

NPO法人ローカルデザインネットワーク 理事長 荒武 優希 様



ジオパークフィールド

一人の静大生が、小山町クアオルト健康ウォーキングに来てくれたのが初めての出会いでした。その若さが眩しく、ガイドや参加者を元気にしてくれました。それからガイドとフィールドの松崎町、学生を結んで行ったオンライン講演、ブレ企画、10月の松崎町ウォーキング実践…と、学生達の学びや行動力に刺激を受けてきました。

益々、ウォーキング×αで、日本も地域も健康で元気にしよう！という視野の広い活動が望まれます。ガイドも学生も地域を動かす歯車の一つになりましょう！

小山町クアオルト健康ウォーキングガイド 米山 民恵 様



多世代の居場所づくりフィールド

素直さともどかしさの中で

フィールドワーカーの皆さん、寺子屋で子どもたちに関わって下さった皆さん、ありがとうございました。みなさんが、子どもたちに視線を合わせてすなおな眼差しで向き合っ下さる姿は、とても微笑ましく温かく安心するものでした。

先日、福祉の学びの中で「主意主義」という言葉を知って感激しました。「ほっとけない、やらずにはおれない。知性より感情が先に来ること」で、ボランティアとも呼ばれるものです。地域に入って人と関わっていくとき、うまく言葉にできないもどかしさを感じるのがままあると思います。どうかその感覚を大切に、不器用でもいいので聞えながら表現してみてくださいほしいと思います。その情動から生まれる対話こそが、人や自分を動かす原動力になっていきます。みなさんのご活躍と幸せを心からお祈りしています。

龍津寺住職 勝野 秀敏 様



静岡大学 地域創造学環 2021年度フィールドワーク報告会

日時 2022年5月26日(木) 10:15~14:45

場所 しずぎんホール ユーフォニア

【司会、舞台、オンライン配信スタッフ】

(地域経営) 3年生 橋ヶ谷 有沙

(地域共生) 2年生 吉田 美空、古瀬 愛優美

(地域環境・防災) 2年生 小林 芽吹

(アート&マネジメント) 3年生 川嶋 梨々花

※学年は開催時のもの(2022年度)

静岡大学 地域創造学環 2021年度フィールドワーク報告書

2022年5月24日発行

編集発行 国立大学法人静岡大学 学務部地域連携推進課 地域創造学環係

【報告会リーフレット、報告書表紙デザイン】

静岡大学 地域創造学環 アート&マネジメントコース 中野真白
